

有名キャラ官能小説CG集第229弾!!

海賊様...こんなの初めてです

ハアハア
ONE PIECE
はあはあCG集

Win
95/98/ME

Win
2000

16 MB
Memory

800×600
85528 Color

マウス
マウス

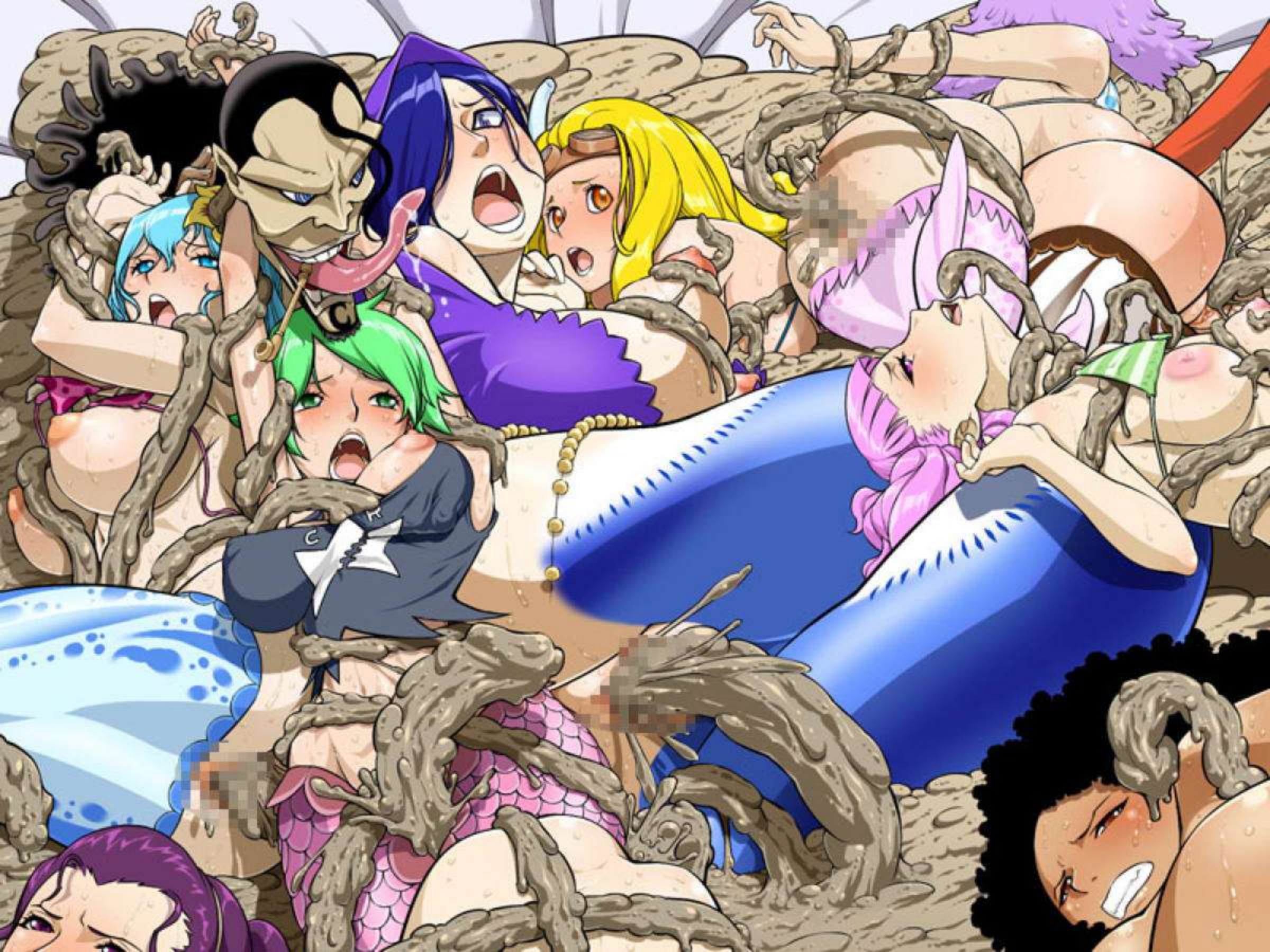
キーボード
キーボード

CG集

成年向























「あ、あの…ルフィさま？ ほ、本当にこれでいいのでしょうか…？」
「ああ、それで大丈夫だぞ。…しかしでっけーマンコだなー。俺が丸ごと入っちゃまいそうぞ」
ベッドに横になり、脚を上げた彼女の股には大きな割れ目が確かにあった。
1ミリのくすみも汚れもなく尻に挟まれて飛び出したマン肉は、瑞々しい果実のように実っている。
「あう…こ、このような格好、それにわたくしのアソコをこんなジロジロと見られて…は、恥ずかしい…」
「なーに言ってんだ。お前の命にかかわることだろ！？ 恥ずかしがってる場合じゃねーだろー」
「そ、それはそうなのですが…クスン」
デッケンのせいで外出もままならない彼女の身の上を聞いたルフィが出した答え…それは、男を識るという事だった。
早い話が一発ヤっちゃまって、そのデッケンとやらにハッキリと失恋した事を突きつけてやるうぜと、彼女は言われるがままに彼の言う通りにする。
「(ニジシ、ま…メシ喰い終わってオレがちょっとやりたくなっちゃったからってのもあるんだけどよ、大丈夫だよなー)」
「ル、ルフィさま？ この後はわたくし、どうすれば…」
ずっと同じ格好をさせられたまま、制止していたしらほしが恐る恐る聞いてくる。
「おっと、わりいわりい。んじゃさ、おめえ乳でけえからそっちからやるかー。よっこらせっと…」

「きゃっ!? な、何をなさるおつもりですか…あっ、んんっ…あっあっ!!」
ルフィはまるで山のような乳房によじのぼったかと思うと、乳首のあたりにもぐりこみ、乳輪の上で手のひらで撫で回した。
「どーだぁ？ 何か感じるだろー？」
「は、はい…胸が…ジーンンとして…こ、これは一体なんなのですか、か…あぁっ、はぁ…はぁ…んんっ!!」
おそらくは自慰もしたことがないであろう綺麗なピンク色の乳輪が、すぐにも反応してムクムクと膨らみ、接地する彼の手のひらを押し上げる。
プルプルと柔らかくふるえる不安定な乳房の上では、ルフィも体勢を崩しかけて思わず“それ”を抱きついて耐えた。
「んあぁあ!? あっあっ、んくううんん!! す、すごく今、わたくしピリっとして…あ、あら…ルフィさま??」
「いてて、あーびっくりした。滑り落ちちゃったぞ。どこだここ？ オッパイの谷間か？」
ルフィがしがみついたのは、勃起した乳首だった。
膨らんだピンクの塔は、ややこぶりながら抱きつくにちょうどよかった事もあったが、まだ彼女がその刺激に耐えられず、思わず全身をよじってしまっていた。
「ご、ごめんなさい、つい…大丈夫でしたか？」
「ほんとーにおめー、せっきす知らねーんだなあ。女ヶ島のヤツラなんかやらせろってうるせーくらいだったのによ。女も色々いるもんだなー」
そう言うと、ルフィは今度は反対側の乳房に飛びついた。しかしよじのぼらず、ちょうどオッパイの肉の付け根あたりで留まる。
「んじゃ、徐々にやっていくとすっかー。………ベロベロベロベロベロッ」
「はひいんっ!? や、く、くすぐたいですルフィさま…あはっあはっはんんっ、あぁあっ」
肉を押し込むように強く舌で乳房の表面を嘗め回して行く。そのまま肉山をぐるりとまわりつつ、頭頂部へむけて少しづつ登っていった。
「んっあ! んんんっ、はぁあっ! な…なにが先ほどより…わたくし、ヘンな…感じが…あっ!!」
「おう、それでいーんだぞ。…よっこらせっと、お? はっはぁ、乳首がピンピンに勃ってるな。よしよしっ」
そういうと彼は、今度こそと乳首に近づきそーっと抱きかかえる。ピクンと一瞬大きく揺れたものの、しらほしが我慢してくれているのかそれ以上の揺れは起こらなかった。
それを確認すると、そのままよじ登り、てっぺんの乳穴を覗き込む。
「うひょー、これが泣き虫のミルクが出るところかぁー。どれ、ちょっと味見してやる…っ」
「…っ!? んはぁあっあぁ、あっあっ!!? はぁはぁ…す、すごく…パチッてきました…あ」
彼が頭をそのへこみに入れた途端、大津波以上の上下落差が生じ、沈んだ反発で盛り上がった乳房の弾力でルフィは突き飛ばされた。
「どっはぁ! あー、ビックリした。すげえ揺れたな、今…お? ちょうどいいところに…おーい、泣き虫ー。今度はもっと“くる”からなー!!」
「え? え? も、もっと…くる?? …あっ、は…はいっ…が、がんばりますっ」

ちょうど彼が飛ばされたところは彼女のお尻の近くだった。マンコの様子を確かめようと今度は尻肉をよじのぼりだす。
「あっあっ…な、なんだかお尻のほうがムズムズと…ル、ルフィさま？」
「よっど、おー。さっきとは全然違うな。マンコから汁漏れてやがんの…お? あの実、旨そうだなっ!!」
ぎゅんとゴムのように伸びた両手が、膨らんでいるクリトリスを掴む。さらにそれをもぎ取ろうとグリグリと肉足を動かす…
「あはぁあぁあ! ル、ルフィさま何を…あぁあっ、あっあぁーっ!!」
「どわっ!? わっぷ! やべ…力が抜けっ…うわーっ」
マンコの洞窟から怒涛のように流れ出てきた液体がルフィの体を押流した。潮を含むそれは、彼の力を急激に萎えさせてクリトリスから手を離させた。
「はぁ、はぁ、はぁ…い、今までに感じたことのないような…頭がまだぼーっとしてます…」
「べっべ! くっせー、びちょびちょだ。よく拭き取らねえと…。けど、これならもうぶち込んで大丈夫だな、よっど!!」
そういつてルフィは再びマンコの前に立った。肉の洞窟が荒々しく息をついて、くばあくばあと小さく開閉を繰り返している。
「よーし、いくぞよわむし! 俺のチンコをいれっから、がんばって耐えるんだぞー! …よっし、ギア3!!」
ズポンをおろしてポロンとペニスを放り出すと、それを一気に大きく膨らませる。ペニスだけがしらほしのマンコのサイズに適合したのになり、その彼女の肉穴に入り込んだ。

「あっあっ!!? な、何か入って…ま、した…あっ! …はうんっ!!? い、痛っ…んんっ!!」
「我慢しろー、くそ…チンコだけデカくすると、やっば重てえなあ。よっど! ちょうどいい、このマンコのピラピラを…っ」
飛び上がり、縦の位置を修正すると同時に両手を伸ばして彼女のマンコ口のピラピラを掴んで位置を固定する。
入り口に張り付いて自分の体で閉ざすような格好で、内部で肉棒を伸び縮みさせた。
「うお! やべ…力が、抜けるっ…なるおっ!!」
マンコ内はさきほどの潮まじりの愛液の分泌もあってか、塩分濃度が高まっていた。海水を苦手とする彼にとってそれは難解な穴ではあったが、根性でペニスを動かす。
「あっ! はぁあっ、で、出たり入ったり…んううん! こ、これってルフィさま…の…?」
「おう、そうぞっ。これがせっきすってんだ、男と女が親しいヤツとだけする遊びだっ、シシシッ」
ルフィ自身は体を動かす余力はない。そのかわり、自分の肉棒を伸び縮みさせる事で、彼女の中でのピストン運動を実現していた。
「はぁ、はぁ…な、なんだか不思議な感じ…ですっ…、さきほどは痛かったのに、今は…んんんっ、ふわっど…して…っ」
「よーし、その調子で感じるんだ。もっともっと良くなってっからなっ (思ったより深えなあ…もっと伸ばしてみるか) 」
チンポをさらに長く伸ばし、腔内を押し進む。
処女だったにも関わらず、閉じている肉壁が案外あっさりとは割って開けては肉棒にしっとり絡み付いてくる事からも彼女が感じている事がわかった。
「あっあっあっ! ど、どどんルフィさまが…んんん、こちらにきておりま…、んふうっつっ!!!?? あぁあっ、ひはあっあっ!!?」

「おわっ、なんだどうしたよわむし!? あ、もしかして…これか？」
ルフィは伸ばしたペニスで彼女の子宮口を撫で回すように押し触れた。瞬間、泣き声にも似た喘ぎが部屋いっぱいこだまする。
「はぁ、はぁ…あああんっ!! だ、ダメですルフィさまあっ、わたくし…わたくしの体、ヘンにいいっ」
「お、落ち着けて! それでいいんだよっ…そうか、全然やった事ねえとこんなに敏感なのか…くのお!!」
身悶えて左に右にと体を転がす彼女に振り落とされまいとしがみつく。その中でも必死に肉棒を突いて隠すことなく彼女を刺激し続ける。
「ああん!! や、やめてくださいましルフィさまあっ、わたくし、わたくしいい…っ!!!」
「も、もうちよいだっ…だぁあっ!! ぬりや、い、イクぞ…っ、受け取れえええっ!!!」
ルフィの肉棒が子宮口にガツンと一発突きこみ、尿道と穴を接続する。伸びに伸びたペニスもこもこも膨らんでいったかと思うとそれはぶちまけられた。
ドック! ドクドクンッ!! プチュプチュブブゴオッ!!!
「はぁあんっ!!? な、何か…熱いものが…っ!!? お腹に、お腹にたまって…えっ」
子宮口を通り、ルフィのザーメンが子宮内部にぶちまけられた。巨大な子宮内に驚き戸惑いながらも彼の精子は泳ぎだす…。

「はぁ、はぁ…はぁ、はぁ…お、終わった…のですか？」
「お、おう…やっど落ち着いたか…あー、疲れた…腹へっちまったぞ俺…」
射精から小一時間、暴れ続けるしらほしがようやく落ち着きを取り戻したのを確認するとルフィはその場にへろへろと崩れ落ちた。
手を離すと、まだヒクついているマンコにまるで喰われるかのようにスッポリと滑り落ちる。
「あっん…あ…、あの…ルフィさま? そのお食事が終わりましたら…その…また、してくださいますか？」
モジモジしながら、恥ずかしそうに問う彼女の口に運動し、マンコもモゴモゴとうごめく。まるでルフィのほうが食べられてるかのような格好となっていた。
「お、おう…気に入ったってんならメシ食わせてくれたらやってやってもいいぞ… (今度はソロやウソップ達にも手伝ってもらいてえなあ…サンジは…ダメだ、鼻血吹いちゃうかー)」
それを聞いて、彼女はばあっと表情を明るくした。
「す、すぐお食事のご用意をしますね♪ ～♪」
なんだかんだでセックスを気に入った彼女は御機嫌な様子で兵士を呼ぶ。
その時ルフィはマンコの中に隠れる形でバレずに済んだが、愛液まみれで腔壁にサンドイッチにされたままでへろへろになっていた。



「コイツ一人が…。まあいい、全員逃がすよりヤマシだな」
魚人は帽子をかぶりなおしながら抑え付けられている女に視線を落とす。それを跳ね除けるようにナミは強く見返した。
「ハ〜モハモハモオツ、さすがはあの“麦わら”の一味だけある。一番弱そうな女だと思っっては囁まれそうだなあ」
「ふんっ…囁まれるくらいで済むかしら？ でも、油断してくれないのはちょっと残念ね」
ナミの言葉に魚人はニヤリと笑う。おそらくはこの一団の仕切り役だろうが、その目は油断なく彼女の動きを睨んでいた。
「厄介ね…どーしたもんかしら。サンジ君のあの様子じゃ皆はすぐには来てくれないだろうし、うーん」
少なくともすぐにも助けが望める状況ではない事は間違いなかった。かといって彼女に窮地においやられた風はない。
「そうやっておとなしくしてくれるのはこっちとしても助かるが…、こういう状況で冷静でいられる方が恐ろしいぜ…」
魚人が軽く指図を送ると、部下らしき者がチャッと刀剣を閃かせてノド元に止める。
ピリッと短く小さな破音が鳴ったかと思うと、彼女のズボンの股間部からブラの中央まで一刀の元に裁断されていた。
「…………、残念ね、こーみえてもそれなりに修羅場はくぐりぬけているつもりよ？ このくらいで動揺するほどヤワじゃないわ」
「…らしいな。だが頭が戻ってくるまでの間、お前に騒ぎを起こされても困るんでなあ」

彼が部下達を見回すように目配せする。
すると、彼らの表情がぱあっと明るくなり、ニヤけ顔へと変化するとせわしなく動きはじめた。
「一体何をすつも…んっ!? あっ、んん…っ…、そういう…こと…あっ!!」
部下の魚人達がナミの体に我先にと手を伸ばした。豊かなオッパイを、ピッチリと閉じた二枚貝のつれメをまさぐっていく。
「クック…俺も部下持ちの身としては、たまにはこいつらにいい思いをさせてやらないといかんのでな、ハアモハモハモツ」
「ふ、ふうんっ…んっつ、あつんっ! なかなかの…んっ、歓迎っぷりじゃない…のっ…お! んっはあっ!!」
元々大きさには自他共に自信があった乳房はさらに成長著しく肉がついている。それを証明するかのように魚人の指は乳肉に食い込んだ。水袋よりも柔らかく、しかし芯のある弾力が指を心地よくもてなしてくる。魚人はさらに力を込めて自分の指が見えなくなるまで埋めた。
「んはあっ! つ、強い…って…、んっあっ…跡ができちゃう…うっ! はあはあ…あなたは、んっ…加わらないのかしら?」
部下ばかりにやらせて、魚人は一切彼女に手を出そうとはしない。
目の前の男女の睦み合いに油断なく目配せしては常に武器に手を置いている。
「ハモハモハモオツ、誘っても無駄だぞ? やっている最中は無防備になる…おれ以外のこいつらわ隙だらけだよなあ?」
「(あら…こっちの腹のうちはバレバレって事…コイツ、やるわね)」
彼らが自分を犯すのならばそれは願ってもないチャンスだった。そこに付け入る隙もあれば、一人でも状況を打破できる術もあった。しかし、部下の魚人達がどれほど興奮して自分の肢体をまさぐり、嘗め回そうとも長である彼は冷静に彼女の指先まで注視している。
「クッククック、まあせいぜい部下達のはけ口となってくれてりやそれでいい。俺は頭の判断の後、お前が生きてりやその時にいただくとするさ」
「んくっ…! んんんっ、…ぎ、残念ね。んつあ! はあ、はあ、あなたならこの連中よりよっぽど素敵な思いが出来るそうなのに♪」
乳首がきゅっとたちあがって打ち震えたかと思うと、すぐさまそれを摘まれてはねじりまわされる。クリトリスが肥大化してきたかと思えばザラッとした舌がすぐにも巻きついてくる…
確実に調理されている中にあっても彼女は隙を逃さぬよう、生きた目で魚人を見つめた。
「なんとでも言うがいい。今、お前の相手は下っ端どもだけよ…クッククック、お前らあチンタラやってっつと頭が帰ってきちゃうぜ?」

それを聞いた途端、部下の魚人達がぎょっとして少し慌てた。
頭が帰ってきたところでお開きになる…次にこんないい思いができるのはいつになるかわかったものじゃないからだ。
「ハアモハモハモツ! 下等な人間が、我ら魚人の種をくれてやるんだ、ありがたく思うんだなあ!」
彼が言い捨てると同時に、部下の一人が自分のイチモツを彼女のマンコに押し当てた。そしてそのまま貝をこじ開けるピックのようにねじ込む。
「くっんっ! んっ…な、かなか…ぶっといの持ってるじゃない…はあ、はあ…♪ あんた達のリーダーよりもよかつたりしてねぇ?」
今、彼女が打てる手は言葉のみだった。巧みに亀裂をこじあげようとのたまってみせる…しかし耳を貸す風もなく、魚人チンポはマンコに深く沈む。
「んっ! くあ…あぐ、ううう。ちよ、ちょっと、もう動くのっ!? よ、余韻つてものを少しは…あっ!」
「無駄だ無駄だ、そいつらの忠誠を揺るがそうとしたところでお前の言葉じゃ誰も聞かぬ。ここにいる者にとって人間は憎むべき敵だからな!」
確かに、腔壁を押し引きするペニスからは乱暴さすら感じられた。腔壁のヒダがトラックにでも轢かれたようにひしゃげ、肉棒に屈する。
「うく…っ、んんんっあ! はあ、はあ…あっ、ん…こ、これが、あんた達魚人のやり方ってわけ…あうんっ!!!」
「その通りよ、ここではお前はただの肉人形にすぎない。こいつらの溜まったモンを処理するだけの存在よお!」
魚人が高らかに笑うと、部下達もグラゲラと笑い出した。捕虜である以上はなから対等ではないものの、彼らの人間に対する差別がその一言に込められていた。乳を揉み込む手が内包する肉を握り潰してしまっても構わないとばかりにギュウっとなりが籠り、乳輪ごと肉が搾りだされる。
「んああああ!! ぐうっ、あつ…あ痛うっ、はあはあ、だ…だからって、この扱いはひどいんじやな…いつっ、んぎいつっ」
「何を言う? お前らが過去さらっていった人魚達、あるいは魚人達はもっとヒドイ目にあわされていたではないか。十分丁寧にもてなしているほうだ」
そうだそうだと部下達も口々に声を上げた。そうなってくるともっと激しくヤっちゃまえと仲間にエールを送りだす者さえ出始める。
「あっあぐっ!? そ、それ以上深く…はっ…ああっ! はああっ、—あつんああああ!!」

ゴリン、グリッ…
嫌な音が衝撃と共に体を伝って聞こえたかと思うと、魚人の肉棒は一段深い場所に乱暴に押し入ってきていた。
子宮口がカアッと熱くなって、強烈に擦れた痛みがジンジンと発し始める——ナミの表情に歪みが表れ、苦悶に耐えかねて唇を噛んだ。
「いい表情だ、その調子でもっといい声を聞かせてくれよ?」
「ぐううううっ、この…あぐ、はうぐっ! ぶつあつ…んあああ、こ、壊れるっ! チンポに…かきまわされてっ…るっ!!!」
まるですり鉢で内容物を破砕するかのように、魚人の肉棒は彼女の子宮を直接かき回す。
壁面が柔軟にその衝撃を押し流そうとがんばるも、それ以上の力を込めて龟头は袋の中をえぐっていく。
「あっあっあ—っ!!! いや、ダメっ…そんな…そんな、子供が、子供が産めなくなっちゃうじゃないのお—っ!!!」
「フン、知ったことが…。まあそれくらいで壊れるようなヤワな袋ならどのみちコイツらのガキを孕めねえぜ…よかったなあ、ハアモハモハモツ♪」
一通り子宮の中をなめずりまわした肉棒は、一番奥まで勢よく突っ込む。ヘソの下から腹の肉が全部押し上げられるような衝撃に彼女は軽く吐き気を催した。
「ふうぐっ…!? や…うっ、そんなところで…ふか、深いっ、深すぎるってええ!」
ドグドグドグッ! グモグボグブッ!! ゴモウゴムウゴボボボッ!!!
奥すぎて射精の衝撃がくぐもり、外からではまったく種付けの様子が伝わってこない。
唯一ナミと、ペニスを挿れている魚人だけが対極の感動を味わっていた。
「クッククック…どうかな、魚人の子種の感想は? 我らのモノは人間などよりももっと濃く香りが強い、マンコが魚人臭くなるかもなあ♪」
ドパッと結合部から流れ出した白濁液を見て、魚人は一様にニヤケ面でナミを見下していた。
「……はあ、はあ—う…う…く…、う…ん…」
「フン、たわいもない…もうへびってやがる。これならお前らだけでも大丈夫だろう、だが油断だけはするなよ?」
魚人は様子を見て彼女を部下に完全に任せると、その場から立ち去った。釘を刺しておいたものの、部下達が興奮にかまけて注意を怠る事は容易に想像できる。
「…あの女が逃げ出そうとする事は確実に…だが、それももはや不可能よ、ハモハモハモツ」

—そして案の定、彼女は部下達の隙をついて逃げ出した…が、すぐにもあっさりと捕まってしまう。
「ううう…な、何なのこのお腹の…感じは…あつ、うっ!」
「クッククック…ご苦労様といわざるをえないなあ」
「うっ! しまつ…。…なぜ、なんでわざと逃げられるとわかっていて!?」
こうなる事がわかっていたとばかりのタイミングで捕縛にきた魚人はまさに計画通りと言わんばかりに笑っていた。
「ハアモハモハモツ! 魚人の種は強い…受精力はハンパなく、成長も早い。お前の腹の違和感の正体、それは急成長する魚人の卵よお!」
「!!! そ、そんなっ…う、う…くつうあああ!!!」
ナミは再び彼らに捕らわれた、そして彼ら新魚人海賊団の苗床として飼われる事となった…。



「ケヒヒヒヒ〜イ！ たアまんねえ〜なあ〜っ！！ 笑いが止まりや〜アしねえええ♪」
カリブーの精神はまさにフィーバー状態にあった。今日ほど自分の能力に感謝した事はないだろう。
「子どももお連れでこれなかったのは残念だアったが…、麦わらのルフィいいサマサマだぜえええ…ケハハアツ♪」
ボンボンと腹を叩くと、その内に捕えた人魚の数を頭の中で数えてはほくそ笑む。
あとはうまく人間界へと浮上する手立てさえつけば……。彼は輝かしい未来を妄想せずにはいられなかった。
「酒にイ〜デカアい船…、あとは女もつかえひっかえできるなア〜…ジュールウ…ツツと〜オ、ヨダレがとまんねえ〜ぜえええ♪♪」
だが、ここから出国するのが最大の難関ともいえた。
海賊としてそれなりに悪名を稼いでいるだけに、簡単に出国手続きを出来るとは彼も考えてはいない。第一…
「…何よりもオ〜…船、だアな〜ア…。麦わらの一味にまアた世話になるのもいいがあ〜…」
見つからずに他人の船に潜伏し続けるのは難しい、カリブーはできれば船を調達したいと思っていた。
「…………おお〜そうだそうだア、俺にはア〜コイツらがアいるじゃね〜のよオ、ケヒケヒツ…人魚サマサマだアアオイ〜♪」

「あふっ…あっ、んああああんっ！ はあ、はあ…も、もうやめてええ〜…」
「んんんっ…らめ、トロけ…ちやううううっん！！ ドロが、ドロがああつっ♪」
美しい場を汚すヘドロの池が一面に広がり、その中で何人もの人魚達が溺れるようにのたうちまわっていた。
「ううっ、くっ…い、いい加減におし…い！ も、もう…アンタの望みは…あつ、かなうんだろ…ううっ」
「そりゃああ、まア〜だわかんねエだろオ？ マダムさんよオ〜…ケハハッ、熟女の人魚もオいいモンだア♪」
美しくしっとりサラサラな清水で泳ぎ腐かれた彼女達の肌を、ヌメヌメとした汚物のようなドロが這いずり回り汚していた。
誰もかれもがなんとか逃れようと努力するも、もがけとあがけどますますドロが体にへばりついて身動きが封じられていく。
「お前さんがア手配してくれた船が本当ウ〜にできるまアではア？ 人魚さん達にはア、俺のドロで楽しんでもらうぜエ〜？」
「くっ…この下衆が…ぐっ、アンタみたいなヤツに…あうっ、このアタシがいいようにされるなんて…」
「そんな、マダムのせいじゃ…ふあああんっ！？ ま、また…あつ！」
年長者として責任を感じる彼女に、泥にまさぐられながらもケイミーが慰めの言葉をかけようとする。
カリブーが数人の人魚を自分の泥の中で溺れさせる様を見せた時点で、同胞を救うためには彼の要求を受けざるを得ない時点でどうしようもない。
「ケハハハハア〜、なアに安心しろよオ。俺の要求さえキチっと守ってくれりゃ〜ア傷つけたりはしねエからよオ〜」
「んくうっ！ うっ、あつ…誰がそんなつ…言葉を信じると、おつ！ はあはあ、信じると思ってるんだ、いっ…ひいつ！？」
彼女が強くてしようとした瞬間、泥が乳房にからみついておぞましいまでの感触で乳肉の深いところまで染みるように揉みこんできた。
肌の細胞のわずかな隙間にさえ浸入してきて汚され、犯されているかのような感覚にマダムの背筋が凍る。
「ううっ、汚れるっ…ふ、触れるんじゃないよ…おつ！ んっあつあつ…ううっ！！」
「そおんなにがんばなくてもいい〜いじゃねエかア？ もオ〜と素直に味わえよオ、俺様のドロをよオ〜♪」
彼女が嫌がれば嫌がるほど、面白げにドロをじわじわと肌のにじみより、覆われてゆく。
そして波のように引いては、ペトリと泥汚れが肌に残る——まるでカリブーが嘗め回したツバの後のように。
「うう、く…おぞましい…、はあはあ…なんてヤツだ〜んっ！！」

「随分とオ嫌われたもんだア〜ケヘヘッ。そんなにイ〜冷たくされると、ますます燃えてくるぜエ〜♪」
カリブーがニタアと笑ったかと思うと、泥溜まりのあちこちでクチャクチャと泥がこね混ぜられはじめた。
ガムでも噛んでいるかのような音は、聞き様によっては卑猥で欲情を煽りたてる効果音のように人魚達の耳をつく。
「うっ…く、一体何を…ん…ふあつあつ！！？ な…つあんはあおつ！？」
クチャクチャ規則正しい音を奏でていたはずの泥が、不意にドチュンと鳴ったかと思うと、マダムの大事な穴一杯に泥の感触が広がった。
「ひいひい！？ 泥が入って…入ってくるよお！！」
「ああんっ、らめえっ！ そんな…とこ…おっ♪♪」
他の人魚達にも同じように、それぞれのマンコに練りまとめられた泥の塊が飛び込んでいった。
元が泥だけに、どんなにマンコ口をキツく閉じていようと簡単に内部に注入され、膣内の容量を超えれば内側から二枚貝はこじ開けられてしまう。
「ケハハハハア〜ッ！！ 俺様のオ泥に入り込めぬエ場所はないんだよオ〜。どオ〜んな女もオ、犯せぬエヤツはいねえええ♪♪」
「はあああああ！？ くううっ、や、やめなあ…あつあつ！ こんな、こんなドロ…にいいっ！？」
ペニスのような硬さやたくましさは微塵もない水と土の混合物…しかし、それが一定の空間内に密度濃く詰め込まれば相応の堅さを持った塊となる。
しかもその泥を自在に操れるとなれば、いかなるマンコの形も大きさも関係ない。どんな女のマンコにも対応する便利なチンポと化する。
「い〜い能力だろオ〜？ アンタがア〜くわえてきた男のだ〜アれよりもオ、い〜い夢エみさせてやるぜエエ？」
事実、ドロは膣内で自在に暴れ回り、Gスポットを常に刺激しつつ膣奥を濁流で突き上げては子宮頸部入り口を取り囲んでいた。
一度に膣内部を余すことなく最大限に刺激し続けられるドロに、人魚達は抗う術も耐える余裕もなくメロメロにされざるをえなかった。
「あつあつあ〜〜！！ こ、こんなにされ…たらあああんっ♪♪♪」
「ひいひいんっ、イグウツ！！ こんらの、すぐ…にい…ちやうふうううっ！！！！」
あちらこちらで人魚達の体がピクピク跳ねる。一度絶頂を迎えてもドロは容赦なく刺激し続け、何度も何度も彼女達は痙攣させられた。
「はあ、はあ…くう…。なんて…ヤツ、だい…っく、あつ！！」

「あいつらはア〜気に入ってくれたよオ〜うだア。アンタも早く俺様に感じちまいなア、マダム・シャーリーさんよオ♪」
完全に勝ち誇った顔で、カリブーは彼女の頬に舌をはわせた。あちこちで真っ赤な顔のまま止まない快楽に身悶える同胞達を救う手立ても見つからない…。
普通ならば折れそうところを、彼女の気性はそれに逆らって逆に意地を立てんとさせた。
「し、…死んでも、屈するもん…かねっ、ううっ…はあはあ、この…ヘドロ野郎がっ！！」
「…………いいねエ〜。まだそおんな口が聞けるなア〜てなア〜。まアすます墮としたくなってきたぜエ〜え！！」
すると人魚達のマンコにドロがそれまでの3倍近く無理矢理に詰め込まんと入りだした。
膣内はもう拡張の限界まで広がっているのにどんどん流れ込むドロのせいで逆流して吐き出される事もなく詰まっていく。
「あぐうううう！！？ ドロが、ドロがああああつ！！」
「は、破裂すりゆううう！！ らめえ、ドロきちゃいやああつ！！？」
「んぐひぎぎきいっ！？ な…なんの、マネ…だい！？ が、はっ…ぐ…るし…ひ…！！」
快楽の絶頂にあった人魚達の膣は、ある程度のドロの増加は受け止められた。しかしそれはすぐに限界がやってきて、その激流の圧力に子宮口が開く。
「ケハハハハハア！！！！ これがア、俺サマ流のオ交尾の仕方よオオ——ツツツ♪♪♪」

ドボドボドゴドゴッ！ ドボウドブドリユゴブ！！ ドルドリュドリュドブボオッ！！！！
大量のドロがついに人魚達の子宮まで入りこんで満ちる。膣内を犯していたドロの倍以上の量がなだれ込み、誰もが下腹部がかすかに膨らんだ。
「うぐううう…な、なんてこと…だい…。こんな、奥まできや、がって…はあ、はあ…」
「それだけじゃあないぜエ？ 今ぶちこんだドロはたアだのドロじゃアねエエ〜…」
カリブーは意味深にニヤけ、一拍おいて軽く息を吸い込む。そして…人魚達全員にしっかりと聞こえるよう、少し大きな声で口を開いた。
「お前らの卵にイ、俺サマのオ精子をぶち込んだのよオオオオ——♪♪♪」
「なっ、…ん…だつて…！？ ハカをいい、たかがドロが」
「忘れたかア？ 俺サマのドロはア能力によるものだぜエ？ そこのオ土くれと一緒にすんじゃアねエよオ、ゲヒヒヒヒヒツ！！」
それを聞いた瞬間、人魚達は目を見開いて硬直した。そして一瞬の空白の時間のあと、彼女達はそれぞれに取り乱し始める。
「いやあああ！ は、早く！ 早くかきださないっ」
「そんな、どうやって！？ こんなのかきだせないっ、あああつ！！」
自分の腹をかきむしる者、自らマンコを拡げて手を突っ込む者…場は阿鼻叫喚と化した。
「アンタ…本っ当に最低のガス野郎だねっ！！」
「なアんとでもいいなア。お前らみいんな俺サマの子を孕んじまっつてんだア、もオ〜つとじっくりしゃぶってやるぜえ、ゲハッハッハア！」
人魚達が沼に沈む…最期までマダムがカリブーを睨みつけながら沼の中へと飲み込まれていった。
「ゲェッ。ヒヒヒ、俺サマの種入り沼でなあかよく確実に孕ませておいてやるとしてエ…できれば女の人魚を孕めよオお前ら♪」
それはカリブーの体がさながら人魚の養殖場と化した瞬間だった。彼の泥沼は人魚達を完全に包み込み、常にマンコを犯しつづけ、孕ませ続ける…。
彼女達が次に見る光…それは、オークション会場の商品を照らすスポットライトだった…。



「よおっしやああ！ イクゼナミいいいっ！！ …ウツ」

ドブッ！ ドグッ！！ ドブブッ！！！！

「んぶっ!? …んぐっ、ごくっ…んはあっ。げほっごほっ、ちょっとウソッ！ あんたねえ早すぎでしょっ!？」
なんとか飲もうとしたものの、あまりの射精の勢いにナミは口を離す。プルンとふるえるウソッの肉棒は自分のザーメンでベタベタに汚れていた。
「まったく…バーでちょっとはカッコよくなったと見直してあげたのに、これだものね〜」
「し、仕方ねえだろ!? 女なんていねえとこにいたんだからよ…これでもがんばってこっちも練習してたんだぞっ」
プンスカ怒る仲間の姿に、ナミの表情がふと緩んだ。気心知れた仲間達との再会、彼らの価値の高さを改めてかみしめる。
「ま、勢いだけはすごかったのは認めてあげるわ。下に出されてたら一発で撃ち抜かれてたかもね…♪」
「へえ…そんなにすごい? なら私の股にもらおうかしら…興味があるわ、フフ」
「おう! いくらでもくれてやるぜロビン、孕んじまってもらねえぞっ」
ウソッはそそくさとロビンのマンコに照準を合わせる。その肉棒は出したばかりだというのに、もう反りあがって復活していた。
「ったく…がつつきやがって、そんなに飢えていたのかお前ら、みっともねえぞ?」
やれやれと一人冷めた風になっているソロも、自分の肉棒を丹念にシコって準備を進めていた。しかし今すぐにやろうという気は微塵も感じない。
「おあいにく、私は空島で結構とつかえひつかえハードにやれたから別に飢えてなんていないけど? ま、おじーさんばっかだったけど…」

「あら、いいわね。んっ…あつふ…、んんっ…孕んじったり…あつ…しなかったのかしら…んふっっ♪」
ウソッのチンポを味わいながらもうロビンに、ナミは大丈夫大丈夫とジェスチャー交じりで応える。
「そりゃあね…おじーちゃんじゃ種なしもいーとこ。薄かったし、一回で10人そこいらとやらないとものたんなくて…そーゆーロビンはどうなのよ?」

「んっんあ…んっ…、そ、う…ね…。んんっ! 有意義な経験が出来た、とでも言うておこうかしら♪
(まさか出産までしてルフィのお父さんに預けてきた、なんて言えないわね、フフフ♪)」
「うおおお、ロビンのマンコ…すっげえ飲み込んでくるぞ!? そ、底なしだった!?」
ウソッがあまりの良さに思わず絶賛する評価に加え、意味深にクスクス笑う彼女に、ナミは怪しむ。しかしその口が開く前にロビンが機先を制した。

「ルフィはどうなの? んんっ…随分とたくましくなったように…あつ、んっ…見えるんだけど?」
「ん? ああ、すごかったぞー。まわり女ばっかでさー、次から次へと眠らせてくれなかったからなあ」
「おま…その話はサンジには絶対しないほうがいいぞ…」
ウソッのツッコミに、真顔でなんでだ?と疑問符を浮かべるルフィ。彼の成長ぶりを肌と感じられるだけでもその武勇伝たるは想像にかたくなかった。
「へえ、ね、ルフィ…じゃあその“修行の成果”をアタシで試してみない?」

「お、相手してくれんのか? 容赦しねえぞナミ♪」
そう言うとルフィは、ナミのマンコに向けてゴムのよに伸ばした自分のチンポをあてがった。うすすら黒光りする様が、その経験回数多さを物語る。
「…すごい、まるで黒曜石みたいじゃない…ゴクンッ! い…いいわよ、はやく…挿れ、んっ! あっ!? んあああっ!!!」
女ヶ島で鍛えられたモノは、ナミのマンコをすんなりと射抜いた。あらゆる女達の様々なマンコを経験したそのペニス、彼女の膣穴も難なく攻略してゆく。
「おああっ!? な、なにコレええ…す、すごい、じゃない…のお♪」る、ルフィあんた…っ、ちゃんとした修行してたんでしょねえええっ?? …んはあっ♪

「モチロンばっちりだ、“コッチ”は夜だったからな、毎日寝不足で大変だったんだぞ?」
自由自在に動く肉棒は、彼女のマンコを余す事なくマーキングしていく。
Gスポットはもちろんの事、ヒダとヒダの間まで自身を擦りつけ、肉棒の匂いをきっちり塗りと塗りたくった。
「はあ、はあ…こんな…こんなチンポ、空島の年寄りチンポじゃありえなさすぎるわっ…すごいじゃないルフィ、んはああんっ♪」

「あら、そんなに凄いの、さすがあの人の息子って事かしら? (お父さんのモノも素敵だったし、さすがは親子って事かしら?)」
ナミの反応にロビンまでルフィに興味を示し始める——その様子に、ウソッはむうっと軽く膨れた。
「おいおいロビン、俺とやってる最中にそりやねえだろ? 俺だってルフィにや負けねえぞ!？」
「あら、ごめんなさい。じゃ、お詫びといたらなんだけど…中にきていいわよ?」
その言葉にウソッの顔がほころび、ナミがぎょっとして思わずロビンの顔を見た。

「ええ!? ちょ、ちょっとロビン大丈夫なの!?」
「ん…全然大丈夫じゃないけど、彼の命中率の方にも興味があるし、ね“そげキング”さん♪」
そう言ってロビンがバチリとウインクしてみせると、ウソッの瞳がハートに染まった。興奮で膣の中で彼の鼻のごとくグンッと伸び上がる肉棒は彼女の子宮口を撃つ。
「あんっ! フフ…なるほど、今までは小手調べ…ってこ、…と…あはあんっ! んんっつ、あふっっ♪」
「おうよ、こーなったら意地でも孕ませてやるぞロビンっ! ルフィにや絶対に負けねえぜっ」
「お? 勝負するかウソッ!? オレも負けねーぞっ」
ルフィも本気になって対抗しあう。ナミの膣内で伸縮して膨張したペニスは、さらにポンッと膨らんで彼女の穴を押し広げた。

「んあっ!? ちょ、あんた達勝手に…んんっ、で…でもっ、イッ!!! これこれ…このチンポ最高っ…♪」
肉棒が膣の敏感な部分を集中的に激しく攻め立てる。すると電撃のような快感の信号がビリビリ彼女の全神経を麻痺させながら脳を犯していく。
一時間もこれを続けられたら確実に病み付きになって離れられなくなるほどの快楽…だが彼はそれを限界点直前で止めてノーマルなピストン運動へと動きを変えた。
「ああん! あつふっあ…こ、これはっ…そんな焦らす方法…までっえ♪」

「ニシシ、こうした方が長く楽しめるって気づいたんだ。ずーっとアレやってっど女がおかしくなっちゃうみてえだしなー」
やりながら女ヶ島の思い出をしみじみと語るルフィには余裕が感じられる。その事からも彼の2年間における性生活の激しさが、どれほどのものだったかがうかがい知れた。
「くそっ…ルフィのヤツ、相当やってやがったな。だが! オレ様もぼーっとしてたわけじゃねえ…、…ッここだあ!」
負けん気から、ウソッが腰を一点にさだめて突き出す。勃起した肉棒の先が、小さな穴をバチリと捉えて貫通した。
「んぶっ!!!? …んは…はあ、あつ…ん。すごい、こんなに深くまで…。クス…ウソッ、本気ね?」
「当たり前さ、男に二言はねえぜっ。覚悟しろよロビンッ…ぬおりやあああああつっ!!!」
肉棒が頸部を貫き、内壁をこすって深部を突き上げる。マンコから子宮の最奥に至るまで決して浅くも容易くもない。
しかし、一般的なペニスの長さをもってすればそれは決して達し得ない深さではない。ましてや今のウソッの長大にして孕ませる勢い最高のチンポを止められるものはない。

「んんんっ、あつ…はあ、はあ…すごい、本気のおチンチン…ウソッの男が…んっっ! …お腹の底から…伝わってくるわ…あつ♪」
「まだまだあ! オレ様のチンポじゃなきやイケなくなっちゃうくらい、味わってもらうぜっ!!!」
二人のドンドンパンパンと鳴り響く激しい結合の音は、傍で聞くナミの性感にもよく響く。
ルフィに犯されている事を踏まえてもこの体の高ぶり具合は想像以上だった。交尾をしているビデオを見せると発情する動物の話を出し出す——人も動物、自分も雌だと思知られる。

「んんっ…はあはあ…ルフィ、もつと…もつと激しくっ…あふっ!? そ、それわあつ、あんああつ♪」
ギュルンと回りこんだ彼の腕は、ナミのオッパイを捉えた。感覚が高ぶって火照る体にその刺激は決して優しいものではない。
「へえ、随分とデカくなってんな。 Hancockはもつとデカかったけど…確かこうすつと…お? おお、締まる締まる、やっばりだ♪」
「あひいいいっ!? ちょ、ルフィあんたこん…なっ、あつあつ…わ、技…どこで…覚えっ…てええええっっ♪♪♪」
乳房の中でも微妙な位置と締め付けによる揉みこみ加減は、乳房に内包された性感帯をピンポイントで捉えていた。
そしてマンコの中でもGスポットを陥りつけるように暴れるチンポが激しく射精の意を示す。

「あはあつ、んはっ…んくうううっ! いい、いいいいいっ…出してっ…ぶっ込んでルフィいいいー…っ♪♪♪」
ブリオブルルルッ!!! ドブウウッ!!!
ブフバッ…ビュブクンッ、ビュビュクッ…ビュクッ…

子宮口を横目にしながら撫でるようにチンポがかすめ、膣の一番奥をドシンと突いた龟头が壁面にザーメンを放射する。
どンドン逆流してマンコから溢れた出た白い液体は、ナミの股間の辺りに巻き散らかされた。いった疲労から、彼女は体重の全てを預け、汚れるのにも構わずにその上に体を落とした。
「!!! こくふっおだあああつ…貫けオレの子種っ、ロビンの卵を撃ち落とすんだああ!!!」
ドグドグゴッ!!! ドグゴッドグウッゴブゴブグウッ!!!!

「んっ、ふ…ううううんんっ!!! あ、熱っ…うあつ…はあああつ!!! (これは予想以上、だわ…フフ、本当に孕んじやってるかも…♪)」
ウソッの男をかけた一撃がロビンの子宮内で卵子を狙撃せんと放たれる。奥深くまで貫いていた肉棒の先端の穴は卵管に向けてセットされ、確実な受精を強いらんと多量の種を放った。
「はーはー、はー…やるじゃないルフィ…、もうちょっとで落ちちやいそうだったわよ…あはっ♪」

「へへっ、だろ? よーっし、次はサンジも呼んで皆でやるか! …ってウソッ。いつまで入れてんだよ、次交代しようぜ交代っ」
だがウソッは困ったような表情でルフィを見る。ロビンがおかしいとばかりに笑いながらかわりに口を開いた。
「それがね、抜けないみたいなのよ。…深く入れすぎたせいね、きつと。フフ、これはもう出し尽くして萎えるまでやってもらうしかないわね」
「あー残念なウソッ♪ アタシもあんたのチンポ、試してみたかったんだけどお? まあソロの準備万端なチンポも気になるし、そっちはそっちでがんばってねえ♪」

ナミのわざとらしいまでの言い回しに、全員から笑い声上がる。
ウソッはなんだか自分が笑われているような気がして嫌な気分になりかけるも、ロビンを独り占めできると思えばまんざら悪くない気がした。
「よおーっし、今日は朝までやるぞおー! ナミ、人数多いかもしんねーけどへぱんなよっ、ニシシ♪」
しかし、サンジは早々に鼻血を吹いてダウン。なんとか一発はナミとやれたもののそれが限界だった。
一人脱落したものの、彼らは朝どころか何日もの間やりまくり続けた。



城を占拠する敵の罠にまんまとハマった彼女は、その大きな体をごんじがらめに拘束されていた。
…といっても、ジャラリと鳴る鎖がつけられているのは首のみ、拘束の殆どは敵の使役する海獣の手足だった。

「あうう…お、お父様は…皆さんは無事なのですかっ!？」
「クッククク…自分の事よりも他の者の事を心配するとは王族の鏡だな、しらほし姫様よ？」
皮肉を込めて尊称をつけて呼ぶ敵の親玉らしき魚人は、みずからも海獣の頭の上に乗っかり、悠然と彼女を見下していた。
横たわる巨体は何もかもがビッグスケールで、標準的な魚人達のサイズでは彼女の乳房にすら劣るほどの採寸差があった。
「ううう…こ、怖くなんかありませんもん! わ、わたくしは…ひ、一人だって…、うう…」
敵味方共に他の者達と完全に隔離された状態…不安で今にも泣き出しそうではあったが、ルフィ達との出会いのおかげか、がんばって涙を堪える。
しかしそんな彼女の努力もむなしく、相手の鋭い眼光で睨みつけられただけでビクンと震え上がり、涙が勝手にこぼれ落ちていった。
「フン、たわいもない。やはりネプチューンと王子達を先に抑えておいて正解だったな。いかに巨大な体軀といえど姫さんは楽なもんよ」
「ふえええ〜、お父様あ〜…わたくし、お役に立てなくて…グスツ、ヒック…」
「ええい、うるさい! …そうだ、どうせ泣くならもっといい声で鳴いてもらうか、それがいいな。クックク……よし、やれ!」

魚人が命じると海獣がさっそくに動きはじめた。何本もある手足をたくみに使い、吸盤のある部分で彼女の体を万遍なく撫で回す。
「はひやひい!?! な、なにをなさるんですかっ!?! や、や…あっはっあ…ん! お、お肌がプチプチ引っ張られて…はううっ!」
手足が肌に引っついては、動くたびに吸盤に吸い付いた表皮が引っ張られてプチンと外れる。それは不思議な感触となって彼女を困惑させた。
「フン、その体軀ならば海獣どもの相手もなんなくこなせよう。なかなか面白い見世物だな」
吸盤が衣服に絡めば吸着力でそれを引き剥がし、難なく乳房からピンクの乳頭があらわになる。
しかしそれを抑えようにも、別の手足が彼女の腕を掴んではなさず隠す事もままならないまま、二つの乳塊は大きくたゆんたゆんと動き続けた。
「ああん、見ないでくださいませっ!! ううう…は、恥ずかしい…」
「絶景だな。俺たちと同じ体軀だったならば、今すぐにでもむしゃぶりついているところだ」
大きければ大きい、その中にダイブするという遊びもできたはずだ——しかし彼はただしらほし姫の恥態を眺めるに留まる。
まだこの国を完全に支配に納めていない今、頭が気を抜く事はできない。先人達のような失敗をしないためにも過度の油断は禁物だった。
「(…滅多にない機会ではあるが…まあ楽しみは事が成った後に取っておくとするか。クッククク…)」
だが、そんな彼の横で我慢できそうにない奴もいた。海獣の一匹が自分のモノをピンピンに隆起させてヨダレを垂らしている。
「きやあぁ!?! な、なんですかそれは??! お、大きな棒が…お生えになって…」

「ん? なんだお前、しらほし姫に発情したのか。そうか、お前達のサイズならちょうどいいのか…なるほどな」
「ンダ、ンダ…タ、タマンネエダ…ヨオ」
たどたどしく喋る言葉にも、どこか興奮した様子がうかがえる。もどかしげに自分のペニスを握っては呷き、苦悩していた。
「クックク…それも面白いかもしれんな。いいだろう、お前にしらほしはくれてやろう。好きなだけ犯すがいい」
「え? え? な、なんですか、わたくしがどうしたと…きやあ!?!」
海獣は悦び勇んで彼女の腰をごろりと転がす。自分のペニスをマンコに押し付けると、行き過ぎた興奮で荒ぶる呼吸を懸命に整えようと深呼吸をした。
「や、やめてくださいませそんなモノを…そ、そんなところに押し付けて…一体何をなさるのです…、っん!?!」
「フォオ…オデ、オカス! オカスウ!! フンハ…フンパーッ!!」
プチッという音と共に、彼女のマンコは真っ二つに割られた。青い肉棒が赤い膣穴に浸入してゆく。
「ああああっ、い…い…だいいい!! や、やめでくだざいいいいい——!!!」

ゴァーッと響き渡る大音響の叫び声に、魚人は思わず耳をふさいだ。海獣はまったく気にせずチンポを押し込み続けている。
おそらくは彼らのスケールでは普通の叫び声レベルの音量なのかもしれない。だが傍で聞いている魚人にとってはいい迷惑だった。
「くそっ…おい、あいつを手助けしてやれ。姫様を気持ちよくしてさしあげろっ!」
彼女を束縛している海獣に仲間をフォローするよう命じる。
するとすぐにも手足を動かし始め、突きこみに梃子招っている仲間の海獣を手助けせんと、その大きな乳房に手をまわしてぎゅっと肉を搾りあげた。
「はひんっ!?! あ、あっ…いやあ、そんなことまで!?! わ、わたくしにいったい何をなさろうとして…あんんっ、はぐううっ」
オッパイをいじられた効果か、マンコの中の青チンポが一段深くまで進んだ。
「はあ、あっあっ…ほ、棒さんも中に…中に進んで…んっ! はあ、う…あっあん!」
ギュムギュムと乳房を搾りあげていただけの手が、今度はその先端の細い部分を使い、乳首をからめとる。
引っ張り出して、とぐろを巻くように乳頭に巻きついたかと思うと、乳首の穴のあたりをまるで蛇の舌のようにチロチロとなで始めた。
「あっあっあ——!! そ、そんな…ところ…、あ、はあっ!! そんな風に…な、されてわ、ああんっ!!!」
「ほう、もう色のまじった声が出てくるか? どうやらお姫様は海獣の相手がお似合いだったようだなあ」
魚人はようやくおさまった叫び声から解放され、自分の耳から手を離す。途端に聞こえてきたのは艶の入り混じり始めた喘ぎだった。

「はあ、はあ…あう、も、もう許してくださいませ…ふうん!! んっんっうう!! こ、こんな辱め…耐えられません…んあアっ!」
海獣同士、意思疎通しているのか、かたやオッパイを刺激して快感で体をほぐせばかたやペニスを押し進める。
二匹の人魚姫の調理は、思惑うまくいっていた。処女をなくしたばかりのマンコが、気づけばもう肉棒を奥まで飲み込んでいる。
「ウァ、ア…タ、タマンネエ…。オデ…イキテテヨカッダア…♪」
感極まりながらもまだ固さの残る膣内を前後に動き始める青チンポに、プリプリの尻肉が近くの筋肉達と結託して浸入者を追い出そうとする。
しかし、相手はマンコのサイズに適合するほどのペニスをもった体軀の海獣——深い場所から決して離れないよう短いストロークで彼女の奥を突き続ける。
「あっあっあっあっ! こ、これは一体なんなのですかあっ…わ、わたくしは、一体どうなって…しま、うのでしょ…う、うんあアッ!!!」

「安心しな、こいつらはデッケンの奴みたいに殺しはしねえだろうよ。むしろもっともっとずーっと気持ちよくしてくれるぜ? クッククク…」
一般的な魚人の彼の目から見れば、その光景は迫力満点だった。
自分達を易々と丸呑みしてしまいそうな穴に、激流のごとく打ち付ける肉棒…結合部から飛び散る愛液はまるで滝つぼのように激しく、彼の元まで飛んでくる。
「アァ、キモチイイ〜、ギモチイイダヨオ。シラホシヒメザマト、オデガ…コノオデガ、コービ…シデルダァア!」
「はあ、はあ…な、なんだか…、ヘンな感じが…んっ! お腹の、奥のほう…からっ、して…まいり…ま、すうっ、はあはあっはあっ!」
時々たまらなくなるのか、しらほしはビクンとして体をよじる。そのたびにドスンと場が揺れ動き、海獣の腰の動きがより激しくなるほど小刻みな振動が生じる。
まるで天災のごとく室内は乱れ、彼女を束縛している鎖も力チャカチャと金属がぶつかりあう音が響き続ける。
「オァァ! オァァァ!! イグド! イグドォッ!! オデノ、オデノタネデ…ヒメザマ、ハラマズドォ!!」
「??? な、何かわかりませんけれど…っ、わ、わたくしも、体が…熱いですうっ、ン、ンあっあっあ…だ、だめ…あ、熱くて熱くて…たまりませんううう——っ!!!」

ドウドウッ! ドボボボボボォッ!! ドブルオオオッ!!!
「っひやあああん!?! な、中に熱いのが??! な…中に…用をたしていらっしやるのですか!?!? (そ、そんなダメです、そんなところに…あっっ!」
膣から子宮へと入ってくる精液は、たぎりきった海獣の熱を彼女へと存分に伝える。
それでいてなお入りきらない量が注ぎ続けられ、射精が止まらないうちから海獣は再度腰を動かしはじめた。
「ひいん!?! や、やめてくださいいい、わ、わたくしは、…あんっ、と、トイレではありませ〜んうっ!!!」
「(おーおー、すっかり盛りついちまってやがる…。デッケンの野郎が見たら卒倒…、いや、俺をふった罰だのいい気味だの言いやがるかな?)」
同盟者が彼女にぞっこんだったのを思い出しながらも、魚人は盛り続ける海獣を止めようとはしなかった。
しらほし姫の巨体を抑えておくには海獣達の力は必要不可欠で、その機嫌を損ねるわけにもいかない……満足するまでやらせるのが懸命だった。
それに、正直お似合いだなと思って眺めていた。その矢先、結合部から飛び出した愛液と精液の入り混じった塊が、彼の顔にドチャッと降りかかった。



「ったく…次から次へきりが無い、もうっ！」
乱戦の最中、彼女は彼女なりに襲い来る敵に充分対処していた。しかし息つく暇のない攻撃に疲労が溜まり、心が焦れてくる。
「この感じじゃ踏ん張るしかないかし、らっ！ ……ふうっ、さあ次はどいつ!?」
ピッと突き出した棒状の武器が真っ直ぐに魚人達を指す。一見弱そうなのは女の女に次々とやられていく仲間の姿に下っ端達はたじろいでいた。
「ふー…やれやれ、ピビってくれて助かるわ。少しは一意つけそ…、っ!?」
一瞬、下っ端達の視線が驚きの表情と共に自分の後方に向けられた事に気づく。鋭く察して振り向きざまに痛打の一撃を放つもそれは空をきった。
「うい…ヒック。おせいおせい…ま、がんばったほうだねえ〜、ごくろうさ〜ん」
「っっ!! しまっ…」
のりくりとした魚人の剣士が彼女の武器を細切れにして剣を鞘に納める…。
チンっという音が鳴ったかと思うと、死角から猛スピードで迫った影がナミの体をかっさらった。
「んあっ!? な、何っ? っ…はや、いっ…!」
「クククク…油断大敵だな。麦わら一味、確かに強い、お前も見た目以上ではあるが…俺達の敵じゃあねえようだなっ」
ごうっ〜と一陣の風だけを残り、彼らは乱戦の中を抜けてその場から消え去る。後に残された下っ端達はただ呆然と立ち尽くしていた…。

「くっ、まだあんた達の部下も戦ってるっていうのに…こんな所に連れてきてどうするつもりっ!?」
グニユリとした感触のタコの脚が手足に絡みつく。表面は柔らかく滑っているものの、しっかりと縛りつけてナミの自由を奪っていた。
「クククク、見所ある女はたとえ人間であっても多少は価値がある…。それに、麦わらどもの動きを封じる駒になってもらいたくな」
「人質にしようって魂胆? おあいにく様、アタシの仲間そんな事でどうにかなるような…ひゃっ、な…なにっ!?」
ヌメっとした脚が今度は彼女の腹部にまとわりついて、下からそのまま乳房の間に突き入った。大きな両乳が左右に押しやられて谷間からタコ脚が伸び上がる。
「うい〜…、オメエらが一筋縄でいかねえのはよおくわかったさあ。俺あの毒にもまるで堪えてなかったようだしなあ…ヒック♪」
押し入ってきたタコ脚が暴れるせいで胸元は窮屈になり、布1枚のブラが悲鳴をあげはじめた。乳房を抑えきれず、パツンと脆い部分を裂かれて内から乳肉が飛び出す。
「っ…何、手籠めにでもしようっていうの? パッカじゃない、そんなんでアタシをどうにかできるとでも」
「思うさ。お前の方こそ魚人を舐めているようだな? 俺達には人間には到底出来ないやり方も可能だ、例えば…」
タコの脚が一本、彼女のズボンの中へと入っていく。パンツの内側、股間の陰毛を撫でながらマンコの入り口を探し当てると、そのまま膣内へと潜入する。
「んっ!! …あ、あきれた…、ただ挿れるだけじゃない、こんなのが魚人のやり方? この程…いっいううっ、な…こ、これっ
てえ!!!?」
異物がマンコに入る場合、その太さや大きさから普通は穴を押し広げられてしまうもの——しかし、ナミの股間を襲う感覚はまったく異なるものだった。
「どうしたニューウ〜? …ヒック、大したことないんだろ〜…? うい〜…」

「こ、こんな…っ、…っんひゃ!?! す、吸い付かれ…っえ…〜〜っつ!!!」
体にとんでもない衝撃が走り、彼女の体がピクピクと何度も跳ねる。膣壁が押されるのではなく吸われているのだ。
タコ脚の吸盤が膣壁のいたところの肉を引っ張り吸い付けるといふ新しい感覚は、想像をはるかに上回る快感となって彼女を襲う。
「随分と良いようだな? デカイ乳が今にも噴火しそうなくらい先っぽがそそり立っているぞ?」
ピクつく乳首の穴を長い舌が突っつき、隆起した丘の上の塔に絡みついて縛る。そのままクイッククイッと引き搾るだけでナミは身悶え、頭を振り乱した。
「はああっ! はあ、はあっ…ぐ…、う、嘘でしょ…こんなにつ…いっいっ、んううっ!!!」
「ニューホッ♪ 感度のいい小娘だあ〜なあ〜…ヒック。そこらの人魚どもよりも面白え〜…♪」
彼女の体に纏わりついていくタコ脚がさらに増え、その乳房にその太股に、表面の粘液をすりつけては舐めるかのように丁寧に這いずりまわる。
いつしかズボンもズリ落ち、パンツをのけてマンコに襲い掛かる脚も増えた。手数で女のマンコ貝を丹念に調理していく。
「ひっ!? いやっ、そこは…あっ、ああっ!! ダメそんなっ…んひっ!!」
細まった脚の先端を器用に使い、クリトリスを縛るとそこにも小さな吸盤を吸い付かせてはギューギューと引き絞った。
赤い豆全体への刺激と、豆の表面のあちらこちら一部への二重の刺激——ただでさえ敏感な場所への攻めは、彼女を狂わせかねない快楽となって押し寄せる。

「はー、はーっ、はーっ!! んんんっ…あ、や…あっ、そんなに、らめ…ええっ!! っんひいいんっ♪」
「おいおい、俺がぶち込めねえじゃねえか…ったく。まあいい、まずはこっちの穴にくれてやるとするか…」
グッと腰を前に出し、性器の位置を定めた場所は尻穴の前だった。前の穴は無数のタコ脚に占拠されて挿れる隙間がなかったからだ。
「や、やめてそっちは!! ——あ、ぐうううっ!!!? ふ…とおおiiiiiiiiいっ!!!」
ミチミチとアナルに割って入るペニスは、人間のソレの何倍も大きかった。尻の肉が内側から押され、ナミのヒップがググッと膨らむ。
「!! ほう…俺のチンポをぶち込んでも裂けないか? クククク…随分と上玉の“奴隷”だ、気に入った」
人種の壁や過去の人間達の行いへの恨みつらみから、彼らは人間を奴隷として扱おうとしている。
だが、上等な奴隷は虐げるよりも手元で可愛がる愛玩の対象になる…性奴隷だ。
「ヒック…ニューふ〜♪ 俺も気に入ったぜえ〜、なんだったらこの女でもいいぞお〜報酬はあ〜…♪♪」
「ふ、ふざけないでよっ、誰がアンタ達の…んはああっ! あっ、んあはああっ!!!」
「クック、イキがいいのは結構だが、なるべく早く従順になってくれる事をススめるぞ? …出来れば壊れてしまう前になあっ」
彼のチンポは、言葉どおり直腸を壊してしまいそうなほどに激しく突き上げてくる。だが不思議と痛みは少なく、お尻の肉がだんだんと熱くなっていった。
負けじとタコ脚がマンコ内で踊るように暴れたかと思うと、奥に進みだす。子宮口に先端からゆっくと侵入して徐々にこじ開けたかと思えば、途中で動きを止めた。

「あっあっあっ!! お、奥っ奥うっ…、な、何コレ…い、ああんっ!!!」
「ニューホッ、さすがにこれはきくだろお〜お? ヒック、どお〜だい、初めて味わう子宮の門を吸い付けるう〜吸盤の味はあ〜?」
袋に達する前の僅かな距離の閉ざされたトンネル、その壁面に吸い付く吸盤達の感触は、ナミを激しく暴れさせた。
快感とも不快ともつかない未知の感触にのた打ち回る。
「はあ——っ!? あっあっあああ——っ、いやっ…はな、はなしてえっ…こんな感じい、ら、めええ〜〜っつ!!!」
だがそれすらも体の拘束を強められて抑制されると、感じる感触がもたらすモノを逃す場を失い、彼女の中を駆け巡った。
「ソレに耐えられる人間の女はおるまい。しかも同時にケツ穴も、その乳も、感じる場所全てを攻められたら…クククク、どうなるかな〜?」
「!!! い、いやあ、やめてやめてえっ!! そんなこと…無理、無理っ、頭がおかしくなっちゃうじゃないの…っいやあ
あっ」
ニツと笑ったかと思うと、魚人は思いっきり腰を打つけた。直腸がぐにやりと歪み、異物を押し出そうと壁面がうねる。
「んあああっ!! やああ、らめ…らめえへええっ!! へうううん、ああんあっんウツンンンッ!!!」
「フッ、ヌッ、…ハッハッハア! まずは腹を満たしてやろうか。本番はそれからだなあっ!?」
「あーっ!! あああ——あっ!!! ひぐっひぐっ、とん…じゃうううっ!!! らめっ、ゆるひてえっ、ぶつとん…じゃ、う——っ!!!」

ドゴドゴボォッ!! ドゴドゴドグウッ!!!
瞬間、ナミは腹を登ってくる大きな塊の感触に、全身を反らして腹を突き出して小刻みに震えた。
白濁の精子の団体は、何千億という数を数えて彼女の腸を登っては滞留して満たす。普段の満足いく量の食事を上回る満腹感が沸きあがった。
「あ…ぐ…はああ…、んは…、しゅ…ごひい…、は、あああ…あ……」
痙攣が止まらず、ポンヤリとした腫が虚空を彷徨う。しかし魚人達に彼女を休ませる気はない。
「さあ次が本番だぞ、俺の“性奴隷”よ。お前が完全な快楽の下僕と化すまで、犯しこんでやる…クククク」

「お! 帰ってきたぞみんな。おーい、ナミー! どこいったんだ!? こっちはもうとつくに終わってたんぞ!?」
「………あ、ああ、ウソップ。心配かけた? ごめんなさい、心配かけて…ちょっと、手間取っちゃって♪」
魚人海賊達の企みは失敗に終わり、ルフィ達の勝利で場は納まっていた。そしてナミも彼らに解放されて仲間の元へと戻ってきた。
しかしそのズボンの下で、マンコとアナルからはとめどなくナミの愛液と魚人達のザーメンが垂れ流れ続けている。
『フン、勝負は決したな。お前は麦わらの一味の元へ戻るんだ。だが忘れるな? もう俺達なしじゃああの快楽は得られねえって事をなあ…』
言われた事を思い出すたびに、マンコがキュンと疼いてならない。仲間を裏切る気持ちに後ろめたさはまったくなく、背筋がゾクゾクして発情してしまう。
『いずれ時期がきたら…わかっているなあ、俺の可愛いナミよ…首尾よく事を運んだら、また可愛がってやる…ククククッ』
口の端を舌がペロリと舐める。色に墮ちた腫のまま、彼女は仲間の元へと帰っていった…。



「ったく…しよーがねえヤツだな。おらよとと…ホレ、上向いてる」
ソロはめんどくさそうにサンジを座らせ、頭を天井向くよう乱暴にひんまげた。
「がっ！ …てめ、なにしやがる…うブツ…」
わずかでも油断すると止まった鼻血が再び鼻腔から噴出しそうになり、たまらず彼は自ら鼻を抑えた。
「どうだチョッパー、まだ輸血用の血はあるのか？」
「正直厳しいぞお…サンジのヤツ、珍しい血液型だし…なあ、血って作れないのかフランキー？」
チョッパーとフランキーはかなり真剣で相談していた。仲間の一人が真面目に命の危機に瀕しているのだから洒落にならない。
「でもよお…血が準備できたとしてどーすんだ？ 常に輸血が出来るとはかぎらね…敵に女が出てきたらなおさらだぞ？」
ウソップの言葉は正確に今後の危険を示していた。女性に接触してすぐにも鼻血をふいてしまうようでは先が思いやられる。
「なら根本から治療するしかないんじゃないかしら…、なんだったら荒療治を試みましょうか？」
「荒療治って…どうするんだ？ どうかから女でも連れてきて四六時同居でもさせるとか？」
「あら、四六時一緒にいる女ならここにいるじゃない♪ うん…この人数なら私一人でも大丈夫ね、フフ♪」
意味深に笑ったかと、ロビンは躊躇いもなく上着を脱ぎ捨てた…。

「お、おいおい…本当にいいのかロビン？ こんな事してもよ…うっおお！」
「あら、じゃあウソップだけやめましょうか？ ココはこんなに硬くなってるのに…クスッ」
そういわれるとそれ以上は何もいなくなる…そしてただ彼女の手でペニスを委ねるのみだった。
「て、てめえ！ なんだお前が一番乗りでロビンちゃんの中につ…なか…うぶっう！」
「パカヤロウ…しよーがねえだろ。お前、そんな状態でまっさきに穴ん中おっ勃てたら今度こそ死ぬぞ？」
ソロが己のペニスを彼女の膣内に挿し込む事にまだ文句が尽きないサンジだが、鼻血の噴出が彼をしづしづ引かせる。
「そーだぜ。これはよう、あくまでもお前に免疫をつけるためにする事だ、いきなり強い刺激は無理ってもんだろ」
「そうね。少なくともこの程度でも耐えられるようにならないとこっちは…んっ…んんっ、サンジ君には無理かしらね♪」
腰を浮かせては沈み、ソロの上で自ら彼の肉棒を抜き差しする彼女は一人全裸で四人の相手をしていた。
それだけでもすでにヤバイ光景だというのに、その全裸美女がセックスをしつつ巨乳を揺らしながら自分の肉棒をしごいている…。
「うっ、うっぐ！ …く、くそおお…ま、負けるかあ、2年ぶりの、2年ぶりの本物の女…女ッ、うぐぐっ！」
エッチという名の褒美がぶら下げられ、サンジは気合で鼻血を堪え続けた。そんな苦行の彼を尻目に、ウソップとソロは悠然と状況を楽しむ。
「うほっ…いい眺めだな♪ ナミもそうだけだよ、ロビン…お前も随分実っちゃってんじゃねーかあ？」
「んっ、あっ…んん…そ、そうかしら？ フフ、ならこんなのはどう？ んっ…」
ロビンは自らの片乳を持ち上げたかと思うと、胴体と乳房の間にウソップの肉棒を引き寄せた。
こぼれ落ちる肉塊が男根にグニュウとのしかかって下乳の中に彼のモノが埋められる。
「おわわわわっ！？ す、すげえ柔らかけ…それでいてなんだこの弾力感っ！ あったけえしそれヤバいって、うひゃひゃっ♪」
「チッ、こっちはせつかくの絶景がお前のチンポが加わって台無しだっつーの。しよーがねえ、中を堪能するとすっかな…つと」
くんとソロの腰が浮かびあがる。何度かゆっくりと大きく腰を浮き沈みさせ、ロビンの動きに同調させようと調節を繰り返した。
「んっ…んん！ あはっ、すごいわ…上手い腰使い…、剣の修行だけじゃなかったみたいね？」
「へっ、まあな…女は一人しかいなかったが、その分密度の濃い“修行”をしてきたからなっ」

ロビンが落とし、ソロが突き上げる…穴と棒のタイミングが合わさったかと思うと、二人はほぼ同時に勢いよく体を浮き沈みさせはじめた。
「うぐぐっ…ふ、ふんっ、う、うらやましくなんかない…うらやましくなんかないんだからなっ！ 俺にはナミさんが…ナミさんと…んぶごうっ！」
「んっあっ、んぶっうん！ タメよサンジ君、想像するとまた噴いちゃうわよ？ …んっ、あはっんあっ♪」
いいながらも、まるであえて妄想の材料を提供するかのように大きな声で喘いでみせるロビンに、ウソップとフランキーが呆れ顔を見せる。
「大丈夫なのか？ いきなり刺激強すぎるとマジでヤバイぜ、もうちょっと抑えてやれよ」
「んっ…あら、それだと荒療治にならないんじゃないかしら？ んんっうっ♪」
フランキーの抑制の言葉も簡単に跳ね除けられてしまう。快感が彼女自身が楽しむ事を主目的に変えさせていた。
「それに…んっ、あなたのそのネジ付きの剛棒を受けるには私もアソコを良くしておかないと…ねっ♪」
「うぐっ、それを言われるとな…。オレのは確かに生半可じゃキツイし…。……ま、まあこれも試練だけ、サンジ♪」
わざとらしく激しく揺さぶって見せられたオッパイが最期の説得役となり、フランキーは己のモノをより一層膨らませた。
「フフ…すごい…んっ、あっ…んん…そんなモノで突かれたら…、んんんんっ、あっゾクゾクするわね…あううんっ♪」
さらにたくましくなったモノを見るロビンの目は妖艶な光が煌めく。
自然と腰が早まり、フランキーのモノを想像しながらより長いストロークでソロの肉棒の根元まで…陰毛同士が絡まってひしゃげあうまで腰を沈める。
「ぐ…おっ、す、すげえ吸い付きだっ…、子宮が降りてきやがっ…ちいいいっ」
「ちょ、ちょっと待ってってロビンっ。そんなにはやくコかれちゃったら…お、オレはいいけどよ、サンジがっ」
「ハアハア…ぶぶっ…、ぐ…う…、ま、負け…るか…あ、んぐぐぐ」
彼女の性的興奮の高ぶりに比例して、腰使いを、膣壁を、手さばきがそれぞれ激しくなる。それらは彼らの生殖器が発する快感も強めることに他ならない。
クスリと微笑んだその表情は、男達を手玉にとる者の優越感からきていた。
「くそっ…負けるかよっ！ このままやられればなしなんざ俺の性にや合わねえ！」
吼えると同時にソロは彼女の太股から尻にかけて腕をまわし、その腰をガッチリと掴んだ。
腕の筋肉がぐっとな膨らんだかと思うと勢いよく彼女の腰を自分のチンポに抱き寄せる！
「あはっ！！？ んっんぶっ…す、ごい…今のっ…奥に、じいって…きて…。んああっ、あっあっっ♪」
ふわりと一瞬、ロビンの顔を隠すほどに浮き上がったオッパイは、本体よりも一拍遅れて落ちてくる。パンツと音がるほど下乳が自身の体に強く打ち付けられた。

カー一杯に押し落とされた体は、結合部で湿った音を交えた柔らかな重い衝撃音を立て、膣内に亀頭の強烈な一撃を受け止めて激しい快感の波を全身に伝える。
「うらららラァっ、これが俺の本気だ！ ファンッ、ムンッ、ヌウワンッ！！」
「あっあっ、んんっ…んはあっ！！ す、すごいわね…こんなにつ、んっあっんんん…っ…激しっ…のっ、はっ…あっ…っっ♪」
胸で…あるいは結合部で激しいセックスのエロい音が鳴り響き、周囲にいる者すべての性的興奮を鼓舞する。
動めく女性の肌がはじく汗は、宝石のように煌めきながら空気中に飛び散り、結合部からは男女の肉体が密着するたびに、圧力で愛液が前後に吹き出す。
「や、ヤベェ…オレも、めちゃうちゃやりたくなくなってきちゃったぜ…ゴクッ」
「お、おい、ウソップ。お前…腰がかがんでるぞ？ …ってオレもか…オナニーまでしちゃってるし…」
フランキーとウソップは堂々と立ててペニスを突き出していたはずが、眼前の女の妖艶な乱れ姿にすっかり本気の興奮に染まっていた。
やや及び腰気味に後ろに引いて、上体が自然と前に倒れている——そうしているつもりはなかったはずなのに無意識のうちに彼らの雄がロビンに屈していた。
「フフフ、もう少し…んっ、待っててちょうだい♪ んっあっ…んーうっ、……んっ！ そろそろ…ね♪」
「ハア、ハア…な、何？ 一体なにが…、んぐっ！？ な…んっ、だどっ…」

ソロは驚き、思わずロビンを見た——射精の我慢の限界、その高みに到達するタイミングを見抜き、同時にグギュッと膣を締め上げてきたからだ。
「く、くあっ！ ち、いっ…まさか俺が…先に、イカ…されっ」
「我慢しないでいいの。思いっきり…んっ、きていいわよ……ん、んっっっ♪」
ギュギュッとなおも締め上げる膣に、ソロは肩を震わせて抵抗した。全身の筋肉がビキビキに緊張してなんとか踏ん張ろうとするも、1秒ともたずに全身の強張りぐすっと消える。
ドウッ！ ドビユドチユドチュブッ！！
「うおあああっ！！ し、搾られるっ…飲まれちゃうっ！！」
ドグンッゴグンッゴグッ！ ゴグゴブッ！！ ゴブボッ！！！！
ソロは上体と脚先が跳ね上げて射精し、小さく痙攣させられつつザーメンを吸い取られた。
中に出した白濁液が逆流して一気に噴出すと、それが合図とばかりに彼の全身からガクンと力が抜け落ちてダウンした。
「んんんん〜っ♪ …ふう、たまらないわねこの感じ…クセになりそう…♪ じゃあ次はウソップ…あら」
ウソップとフランキーが驚愕しながら見る視線の先にロビンも振り向いた。そこには真っ白になって最期の一滴の血を鼻から垂らし、気絶したサンジの姿があった。
「…ちょっと意地悪が過ぎたかしら？ 急いでチョッパーを呼んできて、…大丈夫、二人は後でね♪」
「「…あ、アイアイサー♪♪♪」」
結局、サンジに免疫がつくことはなく、なんの解決にもならなかった…しかし、他の男達はそれから極楽のような夜の船上生活を送り始めたという。



「へっ！　なんでえ威勢がいいのは口だけかぁ？　バーでの勢いはどこいったよ、へっへっ」

「クッ、不覚だわ、こんなニセ者に…」

仲間の一人もいればまず遅れを取らなかつた…いや、一人でもこの程度の連中に負けるはずがない。それだけの知識と技術を積んできたつもりだった。しかし程度の低いゴロツキと油断したのが仇となってナミは捕らわれてしまった。

「おれの誘いを断るたあ上等だが、相手が悪かったな！　おれはあの“麦わらのルフィ”だぞ？　名前くれえは聞いたことあんだろ、あぁん！？」

「フン…、バッカじゃない。だからなんだっていうの？」

ニセ者風情が名をかたって威張り散らす様は、彼女からすれば滑稽の極みでしかない。他の連中も似ても似つかない者ばかりで、ニセ者を語るにしてもお粗末過ぎる面子を前に鼻で笑ってみせた。

「！　…こ、このアマぁ…どこまでもナメた態度とりやがって！！」

「（お、おいデマロお…コイツもしかして俺達がニセモノだって気づいてんじゃねえかあ？）」

「（ばっ…バツキヤロウ！！　仮にそーだとしてもんな事今言うんじゃねえよ！　せつかく仲間に集めた連中も見てんだぞ！？）」

事実、遠巻きながらに控えている海賊連中は、いずれもそれなりの額のついた賞金首達だ。ルフィの名で仲間に来たものの、ニセモノとバレれば途端に怒り牙を向けられる。

「（とにかくだあ！　今あこいつの処遇をどうするかであいつらにも威厳つてものを示さなきゃならねえ！　ちゃんと装ってる！！）」

「何をゴソゴソと話してるのかしら？　このニセ…」

「だぁー！！　っとと…こ、コイツう、優しく下手にでてやってるものをいい気になりやがって！」

彼は慌てふためいて彼女の言葉をかき消すと、その勢いで仮初の憤りを演じつつ、乱暴にブラを剥ぎ取る。ブルンとこぼれだした豊満なオツパイが衆目にさらされ、見ている海賊達は歓声や口笛を上げた。

「！　…だから何？　こんな事でよろこぶなんて、幼稚ね」

「～～～っっ！！　デメエ…よっぽどヒデ目に合いてえらしいなあ！」

猛り怒号を叫びつつも、その手は情けなく彼女のズボン脱がしにかかっていた。ズリズリと肌との摩擦にひっかけてなかなか下ろせないのを見かねた仲間が、助け舟を出して引っ張る。

「んっ、…それで、どうしてくれるっていうのかしら？　私としてはちょうど涼しくていいんだけど？」

どこまでも屈しない毅然とした態度に彼らの焦りも募る。彼女が泣き叫んで媚び屈しなければ示しがつかないだろう。

「この…うらあっ、どうだっこのメス猫がっ！　デケ乳しやがって、揉んでもらいてえとばかりに膨らんでんじゃねえか、ガハッハッ！」

「あんっ、んうっ…ちょうど重くてこってたところだったからいいマッサージね、んんっ」

感じないわけではないが、ただ力任せな揉み方では何時間かけても彼女の心を折るに足りない。粗暴に驚揺んで握ってきては痛みで逆に冷めてしまう。

「っ痛！　ちょっと！　やるならもっと丁寧にしなさいよっ、下手クソねっ！」

「う、うるせえ！　おれに指図するなクソアマあっ！」

両手を使いだして両乳を掴んでそれぞれを上下左右に揉み動かす男の手は、それなりに女を抱いてきたであろう手つきではあった。しかし…

「（何コイツ…全然ダメね。空島じゃおじーさんばかりだったし、久しぶりにちょっとは遊んじゃおうかと思っただのに…）」

「おらうらっ！　どうだ、へっへっへ…声を出してもいいんだぞ？」

「……あぁんっ、もっとお～、そんなんじゃ全然ダメ、物足りないわあ～」

多少わざとらしいとも思ったものの、このまま楽しめないのも痛かった。ナミは本音を織り交ぜつつも喘いでみせた。

「へっ…へへっ、やっとしおらしくなってきたじゃねえか。こっちの具合はどうだあ、んんっ？」

「あっ、ん…うううっ、はあ…、んんんっ…（そこ、もうちょっと…ああ、惜しいもつとそこでしょ？　もう、信じらんないわ）」

マンコに指を入れられてかきまわされだすと、それなりに気持ちはよかった。しかしもう後一歩、より感じる部分を逃され、届かず…じれったい。

「んんんっ、…ああ、そこそこ…お！　んんあっ、あっ、はあぁんっ」

思わず自分から腰をくねらせ、敏感な部分を指にあたるようもっていく。ヒダがざわついて指に絡まると、飢えていた膣壁が一気に狭まって指に迫った。

「おっっ！？　いい吸い付きしてんじゃねえかこのマンコはよお。指が食われるかと思っただぜ！」

「あぁんっ…、はあ…ふう…。（もう！　あと少しなのにっ）」

男は肉壺の具合の良さに驚いて思わず指を引き抜く。大きな快感の塊がきそうなところで中断し、欲求不満にますます油が注がれる。

「へっへっへ、具合も良さそうだな、物欲しげな穴しやがって…そんなだらしねえマンコにやおれのナニをぶち込んでやる！」

「（あんたが挿れたいだけじゃない。いーからとつとと来なさいよっ）」

欲求不満が募って軽くイラだってくる。そんな事は露知らず、男は自分のペニスを彼女のマンコへと突き入れた。

「んっ…あぐっ！　あ、あっあっ…つっ…うう！　（前戯足りてないからちょっとキツ…でも、これくらいがちょうどいいかしら？）」

まだ十分ほぐれていないマンコに押し入ってきた肉棒は、お世辞にも巨根とは言い難かった。それなりに大きくはあるものの、彼の体軀から考えるとやや物足りなさを感じずにはいられない。

「ガッハッハ！　どうやらおれのモノを気に入ってくれたようだなあ？　少しは思い知ったかあ！？」

グリグリとまだ柔軟になっていない膣壁を、無理矢理かきわけて入ってくるペニスに舌間を浮かべるナミの様子に、男は自信を深めて満足げに笑う。

「はあ、はあ…最低、こんな無理矢理入れ込んで…それで悦んでるなんて自分勝手なセックスにも程があるわっ」

「なん…だとお！？　うるせえっ、女ヤるときゃあおれ様が気持ちよけりゃそれでいいんだよお！　デメエのことなんぞ知るか、ウラアッ！！」

逆切れして暴言を吐いたかと思えば、強引にナミの太股を掴んでその体を上下に揺さぶります。自分からは動かず楽な、自己中極まりないファックが始まった。

「んぐっ、あっんあっ、ぐうっ！　あくあぁあ、ちよ、ちよつとおっ…うくっ…アンタも…はあはあ、動きな、っさい、よおっ！」

「だまれっ、ごちゃごちゃ抜かしやがって！　黙ってマンコ締めてろクソアマがあっ！！」

それなりに水気のある音が混じってきている。とはいえ擦れる部分はまだ激しい動きに耐えられるほど滑り気はなく、摩擦熱が膣壁を焼く。

「あっ、ぐ…はあつん！　あ、熱…んあつあっ！！」

「そうだあ、熱いだろお、おれ様のたぎる巨根はあよお！！　マンコがトロけそうだろお！！」

もはや文句を考えるのもわずらわしい。こんな最低の突き上げでもなんとか快感を得ようとマンコはペニスの感触に神経を尖らせる。

「ふう、ふうん！　あ、あっあっ、くううう！（で、でも…久しぶりのチンポはやっぱいいわあ、ないよりマシってヤツね…）」

濁いた女を少しでも潤そうと、彼女の肉は男をより感じようとしていた。性感帯を敏感にさせて、犯されている事を強く意識する。愛のある繁殖行為を別とすれば、薄汚れた嫌悪感のある要因は性欲と興奮を沸かした一因にもなる。本能はそれを糧に快感を膨らませ、ナミに与えていた。

「んああっ、あっあっ…くうう、も…もつと、もうちよいいいっ！　あと少し…少しいいっ！！」

「ハッハッハ見ろっ、野郎どもお！！　女なんぞマンコにチンポぶち込んじまえばこの通りよっ」

男は高らかに怒鳴り散らし、意気揚々と快感を貪る。調子に乗って肉棒を無理矢理深くにねじ込めると、そこでムクムクと亀頭が膨張する。

「んひいい！？　あ、押しして…突き上がって、く…るうううっ！」

肉々しい感触がようやく子宮に響いてきたかと思うと、ペニスはグリグリと先端を子宮口になじりつけて射精を予告してきた。

「さあ、今日からお前はあの“麦わらのルフィ”のモノだっ。消えねえようにたっぷりとマーキングしてやるあ！！」

ビュルルッ！　ドクウッドビュビュビュッ！！

「んふっっ！？　んっ…んんっ…んっ…（あー、久しぶりの中出しの感触♪　でも全っ然物足りないったらありゃしないわ、ハア）」

そんなナミの気持ちをよそに、ニセモノは自分のチンポを抜いてマンコから精液が垂れる様を海賊達に良く見えるよう脚を開かせる。わっと盛り上がる海賊達一同に気を良くした彼は、調子に乗って口を開いた。

「おお、そうだ。どうせならお前らにも食わせてやろうかあ？　おれは気前がいいからなっ、ハッハッハッハ！！」

「（あら、それって…願ってもないじゃない。全然不満も不満だし、これだけいるなら……ペロリ♪）」

ニセモノのルフィが仲間になった海賊達の中にナミを突き飛ばす。群衆に揉みくちゃにされながら彼女は興奮いきり立つ男達に飲み込まれていった…。

「ふ…あー、スッキリしたあ♪　…ま、腹八分目ってどこかなー」

「な、なん…だと…？　…あがっ！」

小一時間、場は乱交騒ぎであったが、途中から男達の地獄絵図に変わり果てていた。後に現場を目撃した通行人は語る…美女を輪姦していたはずの海賊達が、美女に輪姦されていた、と。

「はいー、じゃり賃は勝手に買っていくわね…ってやだ“やりちん”ってなんか下品だわ～♪」

最期の男にも痛打を当てて気絶させると、死屍累々と倒れている男達の側にしゃがむと、財布や金品を手早く抜き取っていく。

「ふんふんふーん♪　…あ、コイツさんざん中に出したくせにシゲてるわねー。こっちはとと…」

「うお！？　なんじゃコリアあ！！？　おいナミー、久しぶりだったのに随分派手に暴れてんじゃねーか…」

ウソップがその姿を遠目から確認して走り寄ってくる。しかし彼女の足元に転がっている男達の海に思わず引いてしまった。

「きゃー、ウソップ！？　久しぶりっ、ちょうどいいところに…こいつらの財布盗るの手伝ってよ♪」

「おま、相変わらずだな…ハハ。まあ元氣そうで何よりだぜ」

「何よちょっとたくましくなっちゃってんんじゃない♪（…やだ、ちょっと欲情しちゃったじゃない。……）」

本物の仲間と和気藹々と会話を交わす内に、彼女の中で何かが再燃してくる。じわりと整えなおしたはずのズボンの股間で染みが広がりだした。

「ね、ウソップ…もうちょっと時間あるから、サニー号に行く前に……さっ！」



「ゼリッ！ それでえ他あどうなったって？」
「あとは…やはり麦わらでしょう。また懸賞金があがったようですよ、ホホホ」
「へっ…それに引きかえ、俺らはたいして上がってねえな。どうするんだティーチ…“まだ”かあ？」
わいのわいのと海賊達が語り合うは、世の中の情報だ。混迷深める新世界での勢力情勢はいまだ先が見えない。
「そう慌てるなよシリウ。それに“コイツ”ほど落ちぶれてるわけじゃあねえだろ？」
ジャラリと金属同士が複雑に擦れ合う音が鳴る。それは海賊達の喧騒の中で異質でありながら妙に溶け込んでいる違和感のない音だった。
「はぁはぁはぁ…うくっ…、ころせ…クソ…っ…」
ティーチにアゴを持ち上げられて照らされたポニーの顔は、疲労の色がありありと浮かんでいた。
「そんな腹になってもまあ一だそんな態度を取れるか。いい加減認めろよ、んん？ そしたらもっと楽しくやれるってのによお、ゼリッ…ぶおッ！？」
ドゴンと鈍い音と共に双方の顔がうっすら赤く色づいた。拒絶の頭突きは綺麗に入り、ティーチはその場にうずくまる。
「ぎ、ザケンじゃねえよ…てめえみてえなクソバタに振る尻尾なんぞ、こちとら持ち合わせちゃいないんだよ」

「このアマあ…、いつまでも頭にのってんじゃねえぞああ！？」
「うぐっ…、がっ…う… あああああああつっ！！！！」
ガツと掴んだ乳房は妊娠で張ってさらに大きくなり、ティーチの大きく汚い手にフィットした。指が肉の中に沈んでいくのに応じて彼女は悲鳴をあげる。ぶっくりと膨らんだ乳首は、今にも母乳を噴出しそうに背伸びをする。粗野な指がすかさずそれをつまみ、クリコリといじり倒し始めた。
「へっ、ちょーっといじっただけでこの体たらく…威勢がいいのは口だけか、ああん！？」

「ぐぐ…う、く、クソ…が…んうっ！！ はあ、はあはあ…はあ…」
悔しさばかりが込み上げてくる。あまりにも敏感に感じてしまうのは母体となったからこその体の変化かもしれない。それでもこんな低俗な輩に屈するなど到底受け入れられるものではなかった。
「フツ…うるさきヤロを塞げばいいだけだが…こんな風によっ」
ポニーの態度に苛立ったのか、シリウは彼女の前に立ったかと思うと自分の股間のモノをその口にねじこんだ。

「ぶごおっ！！ ご…もああっ、がっ…はっばぶくうっ！！！！」
「おいおい、あんまり乱暴にしてやんなよ。身重なんだからよお、いたわってやれや…なーんてな、ゼリッ」
自分も半ば苛立っていた事もあって、ティーチも彼女の苦しむ様に機嫌をよくした。これみよがしにグーで膨らんだ腹を軽く殴ってはその反応を楽しむ。
「へっへっへ、ここに俺様のガキが入ってるってえわけだ。そらそらあ」

「んぼっ、ごぼおおおっ！！ ごあ…あばああっ！！！！」
必死に身をよじて拳から腹を遠ざける。何かを叫んではいるものの、ペニスをくわえこまされては言葉も言葉になっていなかった。
「ホホホ、望まぬ男の子供でも大事なんですかねえ？」

「ガキが生まれたら次はおれ、おれに孕ませるニヤ、ティーチ！」
なんだかんだで仲間達がポニーを取り囲み、それぞれ感心を寄せる…それは“所有者”であるティーチの優越感にもつながる光景だった。
「ゼリッ！ 俺様の女だぞピサロお。…ま、ガキが生まれりやまた孕ませるさ。孕んでるウチはおめーらも好きに“使え”ばいいぜ」
「ぶぐぐ…っ、ふ…ふ…、う…う…！！ ガッ！！！！」

その時、他の者にもはっきりと聞こえる…そして誰もが己の股間が縮み上がらせざるを得ない音が響いた。次の瞬間、ポニーの顔が横に跳ねてシリウがうずくまる。
「ふー、はー、ふー、…はあはあ、ふざけんじゃないよ！ そう何度も…お前らの思い通りなんざさせるもんかっ」

「ゼリッ！ 油断したなシリウ、だが…まさかこの状況で嘔みやがるとはなあ、いい度胸だぜますます気に入った！」
そういうと、ティーチはポニーの体を抱き寄せてその股間部を己の股間に合わせる。ぐっ…と一瞬強力を入れたかと思うと彼女の口が大きく開いた。
「あつぐうっ！ ふあうっ…くうん！！ はあ、はあっ、んあはあっ」
「どうだオレ様のチンポの味は？ 久しぶりでウマイだろお？」

「うっ、くつう…だ、誰がこんな粗チン…まずくて反吐が出るよっ！ うう…っ」
精一杯の悪態も説得力を持たない。体は確実に挿入を悦んでしまっているからだ。挿れられた瞬間、乳首がますます大きく膨れ上がり、マンコからは愛液が噴出し始めている。
「はあはあ…ティーチい！ このアマ…ぶっ殺してもいいか！？」

「まあ、待てよシリウ。…おいポニー、シリウのチンポを“撫でて”やれや。でないと…腹のガキが死ぬぜえ？」
場にいる全員が理解する。もし彼女が意地を通し続ければどうなるか…シリウもニタリと表情を変えると、剣に手をかけた。
「！！ うぐ…う、く、クソッわかったよ…う、う…くっ。…はあ！？ あっ、あっ…や、やめ…んんっ！！」

そろりそろりとシリウのペニスに手をかけたポニーだったが、擦りはじめるよりも先に腹の中の肉棒が動き始める。袋の入り口を突かれるたびにビクリと怖れて身を震わせた。
「英才教育ってヤツだな、俺様みたいな海賊になれるよう乱暴に叩いてやるぜえ？ ゼリッ」
ティーチに彼女の体を気遣う理由はなかった。死ぬばそれまで、腹に自分の子供がいようがティーチの誘いを断るポニーは単なる捕虜にすぎない。激しいペニスをピストンがご無沙汰だった膣を激しく打ち鳴らす。

「んうっ！！ あっあっ、くあっ。はあはあっ、や、やめっ…子供が、子供が…うくううっ！！」
「マンコ緩めねえようにしろよ？ 締めまりが悪けりやいつでもガキ貫いて袋ん中まで突き破ってやるからよ、せいぜいきばって守れや、ゼリッ！！」
肉棒の突く音はズバンズバンと大きく力強かった。この男なら本気でやりかねないと思ったポニーは、嫌々ながらも懸命に膣を締める。彼を悦ばせるためではない、子を守るために…。

「フン…こっちはいつになったら相手をしてくれるんだ？ それとも…斬って欲しいか？」
「くっ！ わ、わかってるよ…うっ、くっ…ふっ…む、はあ、はあっ」
シリウの剣が鞘から抜かれそうになるのを見て、慌てて手を動かし始める。絡み付くように両手を縛る鎖が重く、腕を前後に動かすだけでも重労働だった。だがポニーは懸命に手淫を行い、マンコを締め上げる。腹の子を守りたい母の本能ともいえるものが彼女の心を押し殺して彼らに奉仕をさせていた。

「そうそう、その調子だぜ。ゲリッ、いつもこれくらい素直ならもっと可愛がってやるのによお。…デカイ乳してるんだ、もっと色気だせや、ああん？」
「あくっ！ はあ、はあ…ちく…ショウツ…、んっあっ、あぐううっ！！ はーはー…このっ」

オッパイが思いっきりその肉を歪めて悲鳴をあげ、痛みを伝えてきた。沸きあがる屈辱と怒りをぶつける事もかなわず、半ばヤケになって膣を狭める。本当ならば大事な体——無茶はできない身ではあったが、せめてもの抵抗とばかりにティーチのペニスから全てを搾り上げようかというほど膣ヒダを絡ませ、肉棒を吸い上げた。
「おほうっ！？ なんでえ欲しいんじゃねえか、女ってのはつくづく食欲だなオイ。こんなになってもチンポに狂うかあ！！」
「う、うるさいっ…そんなんじゃっ…あぐくっ！？ バッ…やめる、それ以上奥にっ…」

グンと突き進んできたペニスは腹を大きく押し上げる。焦るポニーの表情に満足げに笑いながらも、胎児を押し退けるようにしてティーチの肉棒はより深みへと乗り込んだ。
「望みどおりくれてやるってんだあ、せっかくだろ？ ガキにも味わわせてやるよ、オヤジのミルクをなあ…ゼリッ！ ーッ！！！！」
「ぐ…ううっ、この…クサレバタ野郎がああ…ッ！！」

「ドグンッ！ グボボボボボッ！！ グボボボブブブウッ！！！！」
ピクンと痙攣するボテ腹の中に、すでに満員のはずの子宮内をザーメンが押し入ってきて暴れまわる。窮屈に耐えかね、膨らんでいる腹はさらに一回り大きく膨れ上がった。
「ひぎいっ！？ や、いやあ…っ濡れるっ、子供が…濡れちまううう…っ！！」

彼女がわめけばわめくほど、ポニーを束縛する彼らには心地いい音色となって耳を潤わせる。生意気で勝気な女が弱さを見せるほど喜びは増幅された。マリンフォードよりここ1年からの間、この瞬間、この射精の時より面白い事は他になかった。
「ぶはー…！ オレも久しぶりだったからなあ…こりやあ本当にガキが濡れちまうかもしねえな？」
「はあ、はあ、んぐっ…はあはあ、ぐく…テメエ、絶対に許さねえからなっ、いつか…いつか必ずぶっ殺してやるっ！！」

今のこの状態からその絵を思い描く事は到底できない…だが、彼女はティーチへの恨みつらみを一つずつ着実に重ね、いつか必ずという思いを強める。
「ゲリッ、ならばオレ様に復讐するまでに何人ガキが出来るか試してやろうか。…もっとも、一生かかってもお前じゃ俺様にや勝てねえだろうがなっ」
黒ヒゲ海賊団の高らかな笑い声が上がる。その渦中で、彼女は悔し涙を流しながら彼らに犯され続けていった…。



レイリーは決して修行中に彼の元へ行ってはならないと確かに言った。

「…あ、あう…、ルフィちゃんすご…いい…♪」

しかし、1年半の間待っていた身としてはおとなしくしていられたわけでもない。しかも様子を見に行かせた部下達がことごとく帰ってこないとなれば、それは彼に会いに行く絶好の理由となって彼女を突き動かす。

「はあ、はあ…こ、これが…おと、…こおおおつ…♪♪」

散らばるように倒れ伏せる彼女らは一様に恍惚として肌を隠さず、天井を仰ぐ。島から城へと戻ってきた時、彼も一緒だった。並外れた食欲がそのまま性欲に置き換えられたかのように城に立ち入る女を食い漁る。

「ああ、る…ルフィっ、もう、許して…おくれえっ、ま、まだ島に…おい、てっ、きた…あっ者達を…むかえ、むかえにいつ♪」

ハンコックがどれほど懇願しても彼は止まらない。そして彼女もまた、自分の体をまさぐる彼の手を除けることはできなかった。

「はあっ、はあっ…まだだっ！ まだ足りねえっ…はあっはあっ！」

修行で身に着けたのが、はたまたまたまたまか…ハンコックを愛撫しながらも彼から伸びた無数の肉棒は、周囲でダウンしている女たちの体を貪り続けている。それでも彼の性欲は満たされず、むしろさらに飢えていっているかのようだった。

「そ、そなたを迎えにいった…も、者がまだ島に置き去りに…いつ…はあはあ…な、なっ…おるといって…わらわがこんな…あはああ♪」

ハンコックは、城にルフィを連れ戻したわけではない——ルフィが“ついて戻ってきた”のだ。自ら様子を見にいった時、部下を強姦する彼の姿に少なからずショックを覚えた、がすぐさま襲い掛かってくる彼に退いた船は、そのまま城まで彼を連れ戻した。それから幾日も飲まず喰わずで城に立ち入る者全てを犯し続けている。ハンコック自身も、彼の指にかき回されているマンコから大量のザーメンを吐き出していた。

「かまわねえ、ほっとけ！ 俺は…俺はお前を犯してえんだっ…あうんぐ！」

「んひいいいっ!? や、やめ…しょ、食事なら用意するゆえ…わ、わらわを喰らうのはあ、ああああっ♪」

頭よりも大きな乳房にかみつかれ、ピクンと体が震える。だが乳首を吸われだすと恐れはえもいえぬ快感へと変わる。

「はああっ、んっあ…そ、そんなことおっ…こ、このような気持ちのよいこ…と、はあはあ、…わらわには止められぬうっ、皆…

許し…いいイイっ♪」

しゃぶりついたまま、思いっきり乳房を引かれて伸び上がる乳房は、潤い豊かなツヤに輝いた。その光は彼の瞳を撃ち抜いて、ますますその欲望を高ぶらせる。他の女達を襲うモノがうねうねと激しく蠢いたかと思うと一層強く彼女らの体を締め付け、あるいは深く貫いてそこらかしこから喘ぎ声を立ち上らせた。

「や、やめておくれルフィ…わらわはいくらでも応じる…ほ、他の者は許して…やっ…んんんんんう——っ!!!」

でかい乳が付け根のところで思いっきり搾られ、吸い上げる力が一層強くなる。乳首が赤く腫れてしまいそうに思うほどの強烈な吸い付きは、彼女に黙れと言ってあるかのようだった。

「す、すまぬ…わらわらが…わらわが悪かったゆえ…あああっ、そ、そんなに強くは…。はうっ…はあ、はあ、はあ」

ようやく乳房から離れた彼の口元からは、一筋の液体が伝っていた。乳汁…ではない——枯渇するという事を知らぬ大量の唾液が、乳へのしゃぶりつきであわ立ち、白くなったものだった。

「本当にデケエな、喰ったらウマそうだ。…片方くれねえか？」

「そ、それはいくらルフィの頼みとはいえ…勘弁しておくれ。……!!! そうじゃ、肉は無理じゃがその…あの…す、数ヶ月くらい待てばミルクは…ポツ♪」

自分の股から流れ出る白濁液が視界に入り、強い繁殖の意欲が沸きたってくる。すでに種がついているかもしれないが、それでも貪欲に望む熱い視線をチラチラと送らずにはられない。

「そんな目で見やがって…コレが欲しいって素直に言えよ、ニジシ…」

彼特有の笑い方——しかし太陽のようなほがらかさはなく、獣が獲物を捕食する時の喜びのような表情が浮かんでいた。

「あ、あ…そ、そっとじゃ、お願いじゃから優しく、今度こそ優しく…くうっうう!!!」

しかしハンコックの意に反して彼のペニスは強烈に腹の底を叩いた。あまりの衝撃に、膣全体がおおきくうねって身をよじり、肉棒にささやかな抗議を行う。

「乱暴にしたほうがいいんだろ？ マンコはそうだってよ、うおおお——っ!!!」

「あーっ！ あああっ、はっふっはくうん!!! や、や…はげしすぎるっ。そんないきなりいっ、ルフィッルフィイっ♪」

余韻にひたる事もなく、すぐさま最高潮の腰の振りでかきみだしはじめるルフィに、ハンコックは心臓が吹っ飛びそうな思いをしつつもなんとか受け止める。約半年に渡り、散々島で女達を食い散らかしたあげく城でも無数の女をイキ狂わせてきた彼にとって、彼女はそんな女達の中の一人に過ぎないのかもしれない。

「はあっはあっふんっ、まだまだ…っうおおおっ!!!」

「ひっあっんっはああっ、んぐっ…はあっはあっはあっ！ こんな、無理…無理いっ、狂う狂ってしまうう

う——っ!!!」

しかしハンコックにとっては想い人との睦み合いだ。本当ならばもっと味わい、ゆっくりとかみしめ、浸り、愛し合いたかっただろう。

だが好いた男とのやり取りを知らぬ彼女にはそのやり方も、男の御し方も、快感の受け方もわからない。ただ必死に襲い掛かる快樂の波に流されないよう踏ん張る事しかできない。

「ハン…コックさま…あ…、ひっ!? る、ルフィちゃんや…わ、私達までまたっ、あああっ!!!」

女達に深く根差したモノが、彼の高ぶる心に呼応してぎゅりぎゅりと激しく動き出す。ドリルのように、あるいは掘削機のように子宮内をえぐる動きに彼女達は全身をひねってのたうちまわった。

苦痛とも快感ともいえる感覚に、よだれと涙をあたりに撒き散らす。それでも胎内のモノは暴れ狂うのを止めない。

「や、やめておくれルフィっ、わらわを…わらわにはいくらやっでもかまわぬゆえ許してやってくれぬかッ」

大切な部下達の悶え苦しむ姿に、思わず口を開く。しかしそれは、彼に他の女に手を出してほしくないという独占欲も絡みでのことだった。

「いいせ、ならハンコック…おめエのマンコに全部ぶち込んでやらあ、ぶっ壊れてもらねえぞッ！」

「はあはあ…わ、わらわを舐めてもらっては困るぞルフィ。そなたの愛、全て一人で受けきってみせ…えっぐぶうううっ!?!」

刹那、一瞬でハンコックの股のあたりの肉が膨れ上がった。同時に肉壁がミチミチと押し伸ばされ、チンポに焼かれる。

「ああああああああっ!!! な、なんじゃこれ…わ…あっ!?!? い、今までと…今までと違い…すぎ、るううう!!!」

子宮口の強固に閉じた穴も、自動ドアのごとくすんなりこじ開けられて鎌首が子宮内をのぞきこむ。彼女の口からわずかに胃酸の混じった唾液が吐きだされた。

「ま、まで…まっておくれ！ こ、このような…このようなまでになるなど…んおおっ!!!」

「へへ、なかなか深えや。これなら全部入りそうだな！」

ゴムのように伸びるペニスが子宮の奥壁を突いてもなお伸びて内側から袋を押し上げる。彼女の腹の中の肉という肉が押し合いひしめきあって子宮が上へ上へと突き上げられていった。

「はああ、あああっ!!! ふ、かひいい——っ、腹が、腹がえぐられて…っ…んんんごっ!!!」

「まだまだこんなモンじゃおわらねーよ、ハンコック」

強引に納まった長大なペニスが胎内でぐるぐるを巻き、肉棒だけで満たす。膣では突き込みでペニスが壁面を削り盡き、快感をより搾りだしてゆく。

「あっあっあっ、る、ルフィッルフィッ!!! わ、わらわの中にっ、わらわの中にルフィがああっ♪」

「へっへ、もっと満ちしてやるさ、こびりついて出せねえくらい奥になっ…おふっ!!!」

ドゴッ！ ドグドゥッ!!! ドグドグドグムグウッ!!!

「あっあ——っ!!! は、腹が…腹が熱いっ、ルフィのが、ルフィの種がわらわを犯すうううう——っ♪♪♪♪」

もこもこと膨らむ下腹部は、中に納まるペニスの腹の表面に浮き上がらせる。

しかしそれも一瞬——すぐにさらに膨らむ腹に飲み込まれるように消え、ハンコックの乳房にも劣らぬ巨大なポテ腹の山が形を成した。

「フッフ、ウッフッフッフ♪ これでわらわは…まごうことなくルフィと夫婦…ポツ♪」

ようやく終わった激しい交尾の末、彼女の腹は彼の種でパンパンに膨らんだままになっていた。

彼女は一滴も逃さぬようマンコに栓をし、下腹部の膨らみに喜びをあらわにしていた。

「これだけの子種じゃ、まず間違いなく子を授かっておろう…ウッフッフッフッ、もう放さぬぞえ、ルフィ♪」

大の字で爆睡するルフィのチンポをツンツンと突っく。その表情は満面の笑みに満ちていた。

しかし、3ヶ月もたたないうちにルフィは旅立ち、ハンコックの元から離れていった。妊娠が発覚したのはその後の事であったという…。